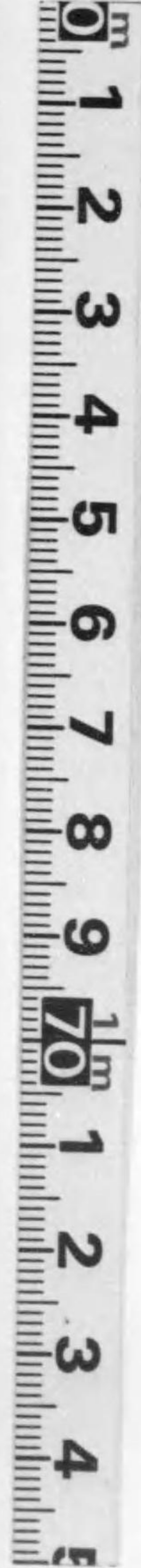




323  
416



始





323  
416

岡本正文  
米田福太郎  
支那語大辭典



323-416



東京外國語學校教授  
岡本正文  
米田祐太郎著

支那語文法研究

東京 大阪屋號藏版

大正  
11. 4. 11  
内交





## 例言

一、余は在支那十餘年の間、支那語を組織的に研究する階段ともなる可き邦文支那語文法の一冊もないと云ふ事を甚だ遺憾に思つて居つたのである。凡そ語學を學ぶ時には文法と云ふ一課目を習はねばならぬのであるが、支那語に到つては唯時折斷片的に他の課目に附随して文法の話が聞かされる丈であつて、余の知る限りに於て、支那語を教授する學校で文法なる課目を設けて講義して居るのを聞かない。それ丈、學者に取つて各詞の的確なる用法を會得するに物足らぬ感を與へて居つた。

二、本書は其の物足りなさを補ふと共に、初學者に對し始めより正し



い語法を示し、一面漢學の素養があつて而も支那語を了解せられざる  
方方に對しても現代語を意解せしむる楷梯たらしめんとした譯であ  
つて、是又余が支那語研究叢書を漸次に刊行せんとするに到れる動機  
である。第二編支那語和譯研究以下各編に涉つて、支那語學者の研究  
に資すると共に一面には矢張漢學者の現代語にて書かれて居る各書  
意解の伴侶となりたいと思ふ。

三、本文の各品詞の名稱其の他も勉めて支那に使用されつゝある名  
稱を其の儘移して使用するやうにした。夫は普通に使用されてるや  
うに名詞、代名詞等でお話をするよりは、更に進んでの研究には本文の  
やうに名物詞、稱代詞……等で眼馴れて置く方が便宜であると思つて、  
名稱は態と變改しないで置いた。支那の文法書と言つても、古文の方

ては馬氏の文通がある位で、現代語の語法などは直派なものは一冊も  
ない。夫は之からの研究に待つより仕方がない。本書も他日を期し  
て諸彦の期待に添ふやうに改訂したいと思ふ。

大正十年十一月

千葉縣館山町楠見に於て

著 者 識



支那語文法研究目次

第一章 總論

支那語法……字と詞……句と讀……主語と説明語

第二章 詞類

名物詞……稱代詞……動詞……區別詞……疎狀詞……助詞……  
介詞……連詞……嘆詞……實字と虛字……練習問題一

第三章 名物詞

固有名物詞……普通名物詞……陪伴詞……具體的名物詞……懸

目次



意的名物詞……代用的名物詞……名物詞の複數式……名詞の三位……練習問題二、三

第四章 稱代詞………三六

人稱代名詞……第一人稱……第二人稱……單純的……複合的……特用的……第三人稱……指示稱代詞……疑問稱代詞……代名詞の的……代名詞の三位……練習問題四、五

第五章 動詞………五七

外動詞……內動詞……同動詞……助動詞……可能的……希望的………指定的……受身的助動詞……使役的……否定的助動詞……

助動詞の位置……動詞と時間との關係……動詞の變態……外動詞の兩式……練習問題六……動詞の散動式

第六章 區別詞………八二

性情區別詞……數量區別詞……指示區別詞……總指と逐指……旁指と虛指……疑問區別詞……代用區別詞……區別詞の二種用法と比較法……練習問題七

第七章 疏狀詞………九四

普通的疏狀詞……時間……場所……數……分量と程度……性情と事件……諾否に關する疏狀詞……特別的疏狀詞……疑問的疏



狀詞……………練習問題八

第八章 助詞……………一〇

前置助詞……………場所……………時間……………情形に用ゐらるゝ助詞……………句末

助詞……………一般助詞……………練習問題九

第九章 連詞……………一七

單獨連詞……………連鎖連詞……………練習問題十

第十章 嘆詞……………二六

歡びの時……………楽しい時……………人を呼ぶ時……………承諾、驚異、心配、疑惑、疲

勞、悔恨、憎惡、憤怒、叱斥、覺悟、人を見下す時……………鳥や物の音聲

第十一章 單句的構成……………三一

句主……………區別屬詞……………謂語……………疎狀屬詞……………謂語と疎狀屬詞との構成

第十二章 複句的構成……………三四

並列式複句構成法……………主僕の複句……………名物詞性的分句……………區別詞性的分句……………疎狀詞性的分句

第十三章 句的分解と句……………三七



單句の分析……複句の分析……句及句の種類……叙述、命令、疑問  
感嘆句……句意の分析

第十四章 話文の組織……………一五九

論事文——蔡元培の勞工神聖

記述文——司馬光破缸救兒……天津發達景況……日記

書翰文——賀友開店……報告市面情形……與友信約看花……探

訪事件

話詩——一顆星兒

〔言文對照文例〕

第十五章 言語と文章……………二二三

文言と現代語の比較……名物詞、稱代詞、動詞、區別詞、助詞、連詞、助詞  
用語比較

附錄練習問題解答……………二二八

支那語文法研究目次 完



支那語文法研究目次

第一章 支那語文法研究

# 支那語文法研究

岡本正文 閱  
米田祐太郎 著

## 第一章 總論

### 支那語法

支那語と云ふと、支那全體の言葉と云ふ譯で大變に範圍が廣い、此所では各省(福建省、湖南省等)の省中や單に一地方にのみ通用される言語に涉つて論ずるのでなく、支那に於て標準語とされて居る普通用語に就て、その語法——文法の大要を説明するのである。



何れの國を問はず、一國の言葉と言へば必ず其を使用する習慣規則があつて、互其の國人間に一定の約束が出て居る。自然に其の型に入つた言語を使ふのが正しくて、其の型たる習慣規則を研究するのが文法であり、語法である。

(2)

### 字と詞

支那語の一字々々を字と云ふのは日本てアとかコとか言ふ片假名を字と云ふのと同じであつて、一字か或は二字以上で、一の意味を持つて居る言葉を詞と言ふのである。例へば「馬」は一字でも詞であり、蜘蛛は一字に切り離してはクモと云ふ意味をなさないの、二字で始めて詞となるのである。

字は一個でも詞ではあるが、全ての字が詞であるとは言へない。

### 句と讀

一事件を話す時には其の一つの事に就て屹度、句と讀とがある。

句とは物の動作や状態や性質等をして、聽く人に一つの連絡して居る觀念を抱かせるものであつて、例へば「張君念書」と言ふと、張君が讀書をして居ると云ふ一の連絡して居る觀念を説明し、張君と、讀書と云ふ動作を聯絡して想ひ起さしむ、此の如く一つの事を説明して居るのが句であつて、例ひ幾つの詞が續いて居らうとも、一句の内には主語となる可き主要語は必ず一詞であつて、一句の内に主語は二つはない。

讀とは所謂一讀み切りのもので完全なる觀念を表はし得ないもの

(3)



である。こゝに「我替他辦事」私は彼に替つて仕事をすると言ふ語句があるとして、我と言ふ詞は一讀、つまり一讀み切り、替他辦事と言ふ詞が又一讀み切りて一讀と云ふ。我替他辦事は二讀て一句、張君念書も二讀て一句、その外いくら讀があらうとも、それは差支へないが、その一句中には必ず一主語があり、説明語と云ふものがあるのは普通であつて、説明語はまた叙述語とも言ふのである。

例へば前二句に就て主語、説明語を區別すれば左記の如くなる。

主語	張君	我
説明語	念書	替他辦事

## 第二章 詞類

詞と云ふのは前述の通りであるが、各詞の性質は同じでない。大體に左記九種類に區別する。

- 一、(名物詞) 名詞
- 二、(稱代詞) 代名詞
- 三、動詞
- 四、(區別詞) 形容詞
- 五、(疎狀詞) 副詞
- 六、介詞 (紹介詞)
- 七、連詞 (連接詞、接續詞)



八、助詞

九、歎詞 (感歎詞、感發詞)

一、(名物詞) 名詞

すべて事物の名稱の詞であつて、森羅萬象、有形無形の論なく、皆名物詞と言ふのであつて、譬へば下の如きは

俄國兵船(水雷)露國の軍艦が水雷に衝突した

俄國と兵船と水雷とは何れも有形名物詞。

中國起了(大)的(支那)には大なる革命が起つた

中國は有形の名物詞、革命は無形の一種の動作——即ち無形名物詞である。

二、(稱代詞) 代名詞

同一の名物詞を何度も繰り返すことは大變に繁雜なことで、例へば米田が米田の郷里の米田の家へ歸つて、米田の弟と、米田の好きな海岸へ行つた等は、極端な例であるが、言ふ方も、聽く方も随分繁雜なことである。こんな場合につき、米田なる名物詞の重複を避けるために稱代詞と云ふものがある。云はゞ名物詞の身替りと思へば差支へない。譬へば、備爲甚麼要打他呢お前は何て彼を打たうとするのか(の例の内、備と甚麼他の類が皆稱代詞である。

三、動詞



動詞は事物の動作を表示する詞であつて、譬へば備先走、我隨後就到（君は先へ行つて呉れ、僕は後から直に行く）の走とか到の類。備看了新聞紙廢（君は新聞を見たか）の看の類が夫れである。此等は行くとか、見るとか言ふ動作を表はして居るのである。

#### 四、(區別詞) 形容詞

區別詞は事物の形状を表示する詞であつて、尙性質とか數量、位置を指示するものもこの詞類中に含れて居る。譬へば

那大院子 裡種了 幾株白牡丹 (あの大きな庭に數種の白い牡丹を植えた)

這小表 一天慢了 五分鐘了 (この小さい時計は一日に五分遅れる)

二例の内、那、大、幾、白と這、小、一、五の類が皆形容詞であつて前例の内、の、那と這は位置を表示し、大と小は形状を、幾とか一や五は數量を示し、白はこれも形状を表示して居る。

#### 五、(疎狀詞) 副詞

副詞は一種の修飾語であり、動詞や形容詞を制限する詞であるが、時には修飾と制限とを兼ねて居る副詞がある。譬へば

滿州的氣令 很冷、風 很大、所以到了 冬天、住民緊關着 窗戶、不輕易 開他 (滿州の氣候は大變に寒く、風が大層吹くので冬になると住民はびつたりと窓をしめて、それをなかく開けない。)

汽車走的 很快、可是 他的臭聞兒 不爽快 (自動車は大變に早い、あの



臭いにほひが不愉快である)  
 この内の<sup>●</sup>很の字は冷とか大とか快を修飾せる形容詞であつて、緊は動詞の關を修飾せるもの、<sup>●</sup>輕易は動詞開字を修飾し、不字は副詞、<sup>●</sup>輕易の二字を制限し、後例では爽快なる二字を制限して居る。何れも皆副詞である。

### 六、(紹介詞) 介詞

介詞は物事の間を紹介する詞であつて、一の名物詞とか稱代詞が他の名物詞とか動詞區別詞の上に關聯して居るやうに紹介の勞を取る詞であつて、一句の内にぶつゝりと斷れて了ふ所のないやうに、その間の關係を表明するには是非この介詞を用ゐなくてはならぬ。譬へば

和了頭説、我的衣裳快給我洗々罷、お前は下女に言つて、私の衣物を早く洗つて呉れるやうに)

この句の内、和の字は名物詞了頭なるものを紹介して動詞説なる上に來て居る。それからの的の字は名物詞衣裳なるものを紹介して稱代詞我に關聯させ、給は稱代詞我を紹介して動詞洗々の上へ持つて來て居る。そしてこの句の内から之等介詞を抜いて了つたと假定すると、全句が何の事やら一向に意味が分らなくなつて了ふ。尙助詞の内を含め細説する。

### 七、(接續詞) 連詞

各詞や各句や各節を接續する作用をなす語を連詞と云ふ。譬へば



雖然我(同)他是同鄉,但是沒有交情私と彼とは同郷であるが、交際はして居らぬ)

この兩句の同字は我と他と云ふ二稱代詞を連接する役をして居るが、雖然(けれども)と但是(たゞし)の二詞は上下の二句を接續する連詞となつて居る。

八、助詞

この詞は原來何の意味をも持つて居るのではないが、語句を助けて話しの呼吸を圓滑ならしむるのである。譬へば

備不去了(麼)君は行かぬのか)

備不願意(辨)那沒法子(麼)君が爲すを希望せねば其れは仕方がない)

上の二例の内て麼と哩の二字の如きが助詞であつて、麼は疑問を含めるもの、哩は叙述を表示する助けとなつて居る。共に語句を補助する助詞である。

九、(感歎詞) 歎詞

歎詞も別に之と云ふ意味を含む詞ではないが、人が感動情激した時に思はず發する聲音であつて、譬へば

啊呀(這)件事(不)好(辨)了(や)アこの事は好く行かぬ)

嗚呀(丟)了(錢)了(あ)ッ金をなくした)

前二例の内の啊呀も嗚呀も何れも驚歎して發する詞であつて、このやうな種類は皆歎詞である。



## 實字と虚字

上述した九詞類の内、意味のある詞とないのと、半の意味を有する如き三種類のある事を想像し得られるであらう。

名物詞、稱代詞、動詞、區別詞、疎狀詞は何れも意味ある詞であつて實字と言ひ、介詞や連詞は半虚半實字、つまり半の意味を有する詞である。それから助詞や歎詞は意味なき詞であつて虚字と謂れて居る。

## 練習問題 一

下記の句中より主語、説明語及び各詞を區別せよ

一、袁世凱死了。

過去

二、幾個小學生上學堂去呢

三、在門前有一個花子了

四、爾和他是弟兄麼

五、不用害怕他是個老實的人哩

六、他念書是念書可是一點兒的意思也不明白

七、雖然他是兵丁不愛打仗愛跑哪

八、大雪紛飛、樹上的鳥兒都凍死了

九、自行車、火輪車和汽車裡頭那是走的快呢

十、我心裡有許多話可說不上來的

## 第三章 名詞



名物詞は全て事物の名稱であつて、天地間に有形無形に數多くの物が存在して居る譯で、其等を種類の上から三種類に分ける。

I 固有的名物詞(獨有名詞) 物質名詞

II 普通的名物詞 普通名詞

III 代用的名物詞 抽象名詞

普通的名物詞を普通と物質と抽象の三種類に区分し、五種として、此所でお話をする。

I 固有名詞は人物とか地名、國家名とか書名とか、つまり一類の物の名稱のことであつて一人一物或は一時代一事と言ふ風に獨有の名稱である。譬へば

孔子是春秋時代魯國的人、他著了一部歷史叫魯春秋、孔子は春秋時代

魯の國の人である。彼は一部の春秋と云ふ歴史を著した

この句の内て横線の施してあるのが、獨有名詞である。左に各種類に就て獨有名詞の例を擧げて置くから参照せられたい。唯注意せられたきは獨有名詞は全て一物一事、單一の名稱であつて、二つとは無いのであるから、この名詞の上に二とか、三とか言ふ數詞を加へては不可なり。

人名——諸葛孔明、哥倫波(コロンボ)

地名——

國有——中華民國、美國(米國)、德國(ドイツ)、英國(イギリス)、法國(フランス)

省、州名——江蘇省、亞洲(アジア洲)

城鎮名——北京、芝加哥(シカゴ)



鐵道名——南滿鐵道、東清鐵道

山名——長白山、落機山(ロツキー山)

島名——菲列濱島(ヒリツピン島)

半島名——斯堪的納維亞半島(スカンデナビヤ半島)

岬名、洲名、海名、海灣名、海峽名、湖泊名、川名、瀑布名、名勝地名等。

宗教名——佛教、耶蘇教

學黨派名——民州黨、直隸派

官吏名——遼陽縣知事、交通總長

學校名——鐵嶺日語學堂、撫順公學堂

商店名——日華書房、博文館

工場名——小石川砲兵工廠、大生紗廠

事名——日俄戰爭、歐戰

物名——東京時事新報、中央公論

時節名——仲秋節、清明節

其他に朝代名、年號名等

固有名詞は大體右のやうなものであるが、同じ小學校でも、單に小學校と云ふことは固有名詞でない。これが大連第一小學校とか、北京民立第一小學校とか言へば固有名詞となるのである。

II 普通名詞

この名詞は前の獨有名詞と反對であつて、單一の名詞でなく、全て同類の性質を表す名稱を指して云ふのである。譬へば



雞、鵝、雁、燕、都是鳥、狗、馬、牛、羊、都是獸、都是是獸、雞、鵝、雁、燕、是全部鳥である。狗、馬、牛、羊、は全部獸である。

前の二句の内て横線の引ひてある鶏以下獸迄の十個の字は普通名詞である。大變に範圍の廣い種類を包含して居るが、その種類の大小には關係なく皆普通名詞である。

次に普通的名物詞の内

物質名詞に就てお話をしやう。それは金屬とか穀類、化學原素、布綿や液體等の各種は皆物質の名詞である。譬へば

中國南方人多吃稻、北方人多吃麥、支那南方人は多く稻を食し、北方人は多く麥を食す。

犁、鋤、都是用鐵做的、犁や鋤は全部鐵を用ゐて作つたものである。

すべて

前二句の内の稻とか麥鐵は皆物質名詞である。こゝで注意せられたいきは此の物質名詞には決して數詞が上にすぐとは來ない。必ず陪伴詞と云ふ物質に依つて異なる數量を表現する字を伴ふて居る。一米とか二布とかは用ゐられないで、一斗米とか二疋布とか言ふ斗とか疋と言ふ字を使用する。

左に陪伴詞の普通使用せられつゝある詞と其の應用範圍を摘記して見やう。

頂(一頂帽子) 一個の帽子

匹(一匹馬) 一匹の馬

塊(一塊石頭、一塊手巾) 一個の石、一枚のハンカチーフ

件(一件衣裳、一件事) 一枚の衣物、一件事



頓(一頓飯) 一度の飯  
 管(一管筆) 一本の筆  
 隻(一隻船、一隻筆) 一隻の船、一本の筆  
 輛(一輛車) 一輛の車  
 封(一封信) 一通の手紙  
 場(一場熱鬧) 一場の熱鬧  
 壺(一壺酒) 一瓶の酒  
 杯(一杯酒) 一杯の酒  
 把(一把棍子) 一本のステッキ  
 所(一所房子) 一軒の家  
 處(一處房子)

間(一間屋子) 一間の室  
 張(一張紙) 一枚の紙  
 雙(一雙鞋) 一足の靴  
 尊(一尊砲) 一門の大砲  
 套(一套衣裳、一套書) 一重の衣物、一帙の本  
 條(一條道) 一本の道  
 個(一個月、一個學堂、一個公司、一個朋友、一個舖子、一個禮拜、一個牲口、一個鐘、一個字) 一個月、一個の學校、一個の會社、一人の友人、一軒の店、一週間、一匹の動物、一個の時計、一字。  
 大體は右に記したやうなものであるが、最も範圍廣く使用されるのは個の字であつて、大抵な陪伴詞の代りに使用して差支へがない。



同じ陪伴詞の内でも、管と云ふのは管のつくやうなものに用ゐ、輛は車輛のあるもの、雙は二づゝある、つまり足袋とか靴とか、眼鏡とか言ふものに用ゐ、條は細長い筋のやうなもの、あるのに使用する。柄は全て柄のある物に伴はれる。個の字も兩個と云ふ場合に個と略される事がある。譬へば兩個人と云ふのゝ代りに倆人と用ゆるのである。次に普通的名物詞の内の

抽象名詞であるが、これは無形の事物であつて、我々が想像する。つまり五官によつて接觸する事の出きない種類の名稱である。譬へて見ると

國家的強盛、全國民的道德和知識、國家的強盛は全て國民の道德と智識とに因る)

この句の内、強盛とか道德、智識が抽象名詞である。今まで説明した名詞の四種類を抽象と具體との兩方面に分類して見ると、左記の例表となるであらう。

具體的	(固有的名物詞) 獨有名物詞……李鴻章
	(普通名物詞)……人、家
抽象的	(普通的名物詞) 物質名物詞……水、空氣
	(抽象名物詞)……動作、感情

名詞には此の外に代用的名物詞と云ふのがあるが、それは後述するとして、此處では尙具體的と抽象的の兩方面から名詞のお話をしやう。具體的名物詞

この名物詞の内には固有的と普通のとの兩名詞を含む譯であるが、



これは全て五官に接觸し、感得し得る種類に屬する物の名稱であつて、例へば雲彩雲とか月亮(月)とか、電話、風、雨、白糖、砂糖、煤氣、炭酸瓦斯等である。それから名物詞に往々附加される字がある。それは

兒と子

であつて、別に大した意味は持つて居らぬが、名物詞の性質によつて、加へられたり、加へられない場合がある。

動詞であるのを名物詞に轉化した場合にも多く、その動詞の下に兒とか子の字が附加されて名詞たることを明にする。例へば蓋するとか、栓をぬく——鑽を名詞として蓋兒(ふた)、鑽子(栓抜き)等の如く、或は區別詞から轉化して來たので、瞎子(盲目)、扁兒(平板)等である。而し一體に北方では多く、大きな名物詞には子の字を加へる。屋子とか房子、臺子

の如く、それから少さなものには兒の字を加へて帽兒とか鞋兒とか謂れて居る。次に

懸意的名物詞

これは抽象名物詞のことであつて、凡て理想に屬するもので、人の品質とか情形、動作等の名稱であつて、耳目口鼻手をもつて接することの起きぬ部類の詞である。例へば品質を表現するこの種名詞として詐欺、伶俐、溫和などの如く、形情を示す詞として貧窮、快樂、成年等。動作を表すものとしては復仇、選舉、嘻笑等。その外に意想に屬するものとしては春夏秋冬、東西南北、上下左右前後の如き種類の言葉である。

III 代用的名物詞

稱代詞が名物詞の用をなす場合



太陽昇上來了他射出的光很亮太陽が昇つて来た。その射す光が大變に明るい)の内て他はもとくゞ代名詞であるが、名物詞として用ゐられて居る。

形容詞が名物詞として用をなす場合

豈不是和主張白話文的根本意思大相矛盾了嗎いかに語文を主張する人の根本意思と大に矛盾せないであらうか)の内て、主張白話文の下に人が略されて居る。區別詞——形容詞が名物詞の用をなして居る。

動詞が名物詞の用をなす場合

他很希望成功(彼は非常に成功を希望する)の一句の内て、成功は動詞であるが、成功なるものとして名詞の用をなして居る。

未成句の語が名物詞の用をなす場合

沒有一個人知道這樣做法(一人として斯様な爲方を知らない)の這樣做法は一句を爲さない語である。句と言へば主客説明の三位置を備へて始めて一句である。これは後述するが、兎に角この三位を備へないのが未成句であつて、這樣做法は完全な句とは言へない。これが名物詞となつて、此の場合に用をなして居る。

分句が名物詞の用をなす場合

他到甚麼地方(是沒有一個人知道彼が何所へ行くか一人も知らない)の他到甚麼地方が分句であつて、これが全て名物詞の用をなして居る。これから

名物詞の復數式



に就て少しく説明して見やう。

名物詞の上に區別詞を加へる復數式

例へば毎年、諸事、各處、數月、好許多東西、好幾件事情……等。

名物詞の上に甚麼を加へる復數式

他們有許多樂器、甚麼風琴、哪鋼琴、哪凡啞鈴、哪笛、哪簫、哪……等(彼等は

澤山の樂器を持つて居る。どんな風琴であらうが、ピアノであらうが、

ヴァキオリン、笛、簫であらうが……)。

名物詞の下に甚麼を加へる復數式

この場合には甚麼は等と同じやうな意味をもつて、何々などのなどと云ふ風に解釋される。

張君(張)活的牲口就是馬牛羊猪甚麼張君の養つて居る家畜は馬牛羊

豚などである)

名物詞の重ね言葉

件々兒(各件)天々兒(毎日)處々兒(各處)……等。

人を表示する名物詞の下に們字を加へたる復數式

弟兄們(兄弟)先生們(先生達)朋友們(朋友達)……等。

性に依つて區別する名物詞

男女兩性に依つて常用する男女(牡、牝、公、母、雄、雌)等は男兒、女兒、牡、牛、牝

牛、公馬、母馬、雄雞、雌雞……等の如く用ゐられて、その名物詞の種類に依

つて相違する。日本でも男の牛であるとか、女の馬であるとか云ふ詞を

使用せぬやうに、支那語でも區別がある。而し其はさう大して難しい

ものでなく、大抵上記四種に區別して話せば差支へはない。



## 名物詞の三位

名物詞には一句の内、或は一讀中にその位置が定つて居る。その一定の位置に三種類があつて、それは主位(主事格)、賓位(受事格)、領位(主物格)の事である。

## 主位(主事格)

名物詞が一句の内、この句を發生する原起物である場名にその名物詞は主位と謂れる。

駱駝是沙漠裏的船(駱駝は沙漠の船である)

太陽出來了(太陽が出て來た)

上記二句の内、駱駝や太陽が此の句を起した主事格であつて、主たる位置を占めて居ることが明らかであらう。

## 賓位(受事格)

名物詞が一句の内、在つて、動詞とか助詞の影響を受けて居るのが賓位の名物詞である。つまり其等の動詞や助詞を用ゐる目的物となつて居る。譬へば

王先生看花(王先生が花を見る)

我寫字(私は字を書く)

花と字の兩名物詞は何れも動詞看と寫の動作の影響を受けて居る。

我從上海來(私は上海から來る)

この上海は矢張、從と云ふ介詞によつて出て來る名物詞であつて、何れも此のやうな名物詞は賓位である。

## 領位(主物格)



名物詞が一句中で、下に一件事物があり、それを受けて居る、それのため名物詞が領位と謂れる。所有物を表示する場合は無論であるが、名物詞の下に的の一字が来た時、譬へば朋友的兒子、中國的百姓の朋友的、中國的の如きは皆領位である。

備看見陳先生的文字沒有呢(君は陳先生の文字を看なかつたか)

この場合、陳先生的は領位であつて、文字なる名物詞はつまり彼が領する所となつて居る譯である。

以上で名物詞を質の方面からと、使用する側からとの研究を終つたのである。

名物詞としての三種類——固有的、普通的、代用的。それを又五種として獨有、普通、物質、抽象、代用に區分して説明し、中に陪伴詞と兒と子の

使用範圍をお話し、上記各種名物詞を抽象と具體兩方面より解説し、更に名物詞の位置より主賓領三位の別ある事をお話したのであるから、支那語及文に於ける名物詞なるものに就ては御了解あつたことと思ふ。

### 練習問題 一一

下句中より名物詞と、その獨有、普通、物質、抽象各名物詞を區別せよ。

- 一、椅子是用木做的
- 二、火車到了客人都紛紛的下車
- 三、中國的教育還不很普及
- 四、那先生是極誠實的人



五、人在空氣裏面和魚在水裡面一般若是沒有空氣人便不能生活

練習問題 三

下句中より名物詞の三位を指摘せよ

一、李兄到戲館子裡聽戲去了

二、那不是倆的兒子麼

三、陳君拿王君的信給李君看

四、蝦米的身上有許多關節

五、在花園子裡有草地有茅亭還有許多花樹了

第四章 稱代詞

代名詞のことであつて、話の場合、白話文を綴る時に同一名物詞の重復をさけるために稱代詞なるものが作られた。名物詞の身替りであることは同一であるが、その性質が同じでないので、稱代詞を三種類に別けてある。

人稱代詞

指示稱代詞

疑問稱代詞

先づ人稱代名詞から話をしやう。これには話をする時に人が自分を指して云ふ我(私)とか我們(私共)の自稱代詞と、倆(君)とか倆們(君達)のやうに人を指す對稱代詞と、他(彼)とか他們(彼等)のやうに他人を指す他稱代詞の區別がある。何れも人の名前の替りに呼ばれ用ゐられる稱



代詞である。

話をする時に一々自分の名前を言ひ、人の名前を繰り返すことは大變に煩しい事であるので、その名前の替りて、それを更に第一人稱、第二人稱、第三人稱に分け、それから各人稱代詞を單純なるもの、復合なるもの、特用なるもの、三種に各別して説明する。

第一人稱代詞

これは自己若くは自分達の代りに用ゐられる代名詞である。

我(私)……………單數

一、單純的 我們(私共)……………衆數

咱們(對話する人を含む私共)……………衆數

我自己(私自身)……………

二、復合的

我個人(私一個人)……………單數

我們自己(私共自身)……………衆數

我們各人(私共各人)……………衆數

三、特用的

本の字を用ゆるもの、例へば本縣長、本廳長……………等、官吏通用語。

敬字を用ゆるもの、例へば敬處(自分の處)敬業(家業)……………等

小字を用ゆるもの、例へば小弟(自分を稱して云ふ愚弟)小姪(姪自身)

に言ふ私)……………等

家字を用ゆるもの、例へば家兄(兄)家嚴(父)……………等

舍字を用ゆるもの、例へば舍弟(愚弟)舍親(私の親戚)……………等

草字を用ゆるもの、例へば草字(私の號)草屋(手前の家)……………等



賤字を用ゆるもの、例へば賤軀(私の身)賤姓(私の姓)……等  
其の他、老夫(私の夫)拙荆(愚妻)小的(私)……等  
特用的の各稱代詞は唯一例に過ぎぬが、何れも他人に對して、自分を謙稱する語である。

官吏通用語を除いて皆同じやう自己を謙遜して言ふ詞である。

第二人稱代詞

この代名詞は話して居る相手方の名の替りに用ゆる。

一、單純的

- 爾(君)……………單數
- 爾們(君達)……………衆數
- 爾自己(君自身)……………單數
- 爾個人(君一個人)……………單數

二、復合的

- 爾這個人(君此の人)……………單數
- 爾們自己(君達自身)……………單數
- 爾們各人(君等各自)……………衆數
- 爾們這些人(君等之等の人)……………衆數

三、特用的

- 尊字を用ゆるもの、例へば尊府(宅尊姓)御姓名……………等
- 令字を用ゆるもの、例へば令兄(御令兄)令堂(御母堂)令尊(御尊父)令弟(御令弟)……………等
- 貴字を用ゆるもの、例へば貴國(貴校)貴方の學校……………等
- 臺字を用ゆるもの、例へば臺甫(貴方の號)臺銜(貴役)……………等
- 高字を用ゆるもの、例へば高名(名前)高壽(年)……………等



大字を用ゆるもの、例へば大號(貴號)大哥(兄貴)……………等  
 老字を用ゆるもの、例へば老丈(御主人)老師(先生)……………等  
 其の他に閣下(貴方)尊(貴方)寶號(貴店)吾兄(貴下)……………等  
 以上は何れも尊稱語であつて、先方に敬意を表する詞であるが、一般  
 通用語として先生(貴方)老翁(御老人)等の語があり、尙労働する人に對し  
 て君の代りに夥計手代さん(堂官御役人)苦力(下級労働者)等の稱語があ  
 る。

先生とか兄とか大哥とか老家とか言ふのは何れも其の語だけでも  
 敬意を表する二人稱代詞ではあるが、その上に人の姓を冠する時には  
 何れも日本て言ふ誰々さんとか君とか言ふ意味になる。

李先生(李さん)李兄(李君)大李哥(李兄貴)李老家(李さん)等の意味をなす

のである。

第三人稱代詞

名物詞の代りに自己と對話する以外の人の名に替る代名詞である。

他(彼)……………	單數
這位(此の方)……………	
那位(あの方)……………	
這個人(此の人)……………	
那個人(あの人)……………	
這幾位(此の二三方)……………	
那幾位(あの二三方)……………	單數
這幾個人(此の數人)……………	

一、單純的



那幾個人(あの數人)……………  
 這些個人(這許多人)此の澤山の人……………  
 那些個人(那許多人)あの澤山の人……………  
 他自己(彼自身)……………  
 他個人(彼個人)……………  
 他們自己(彼等自身)……………  
 他們各人(彼等各自)……………  
 復數  
 單數  
 衆數

指示稱代詞

吾々の面前に在る事物や私共が互に話す時間を一々擧げて、何々の品物、何日何時何分と云ふ風に繰り返すことは矢張前述の通り甚だ繁雜を免れない。そこで事物や場所や時間、方向の名物詞の替りに簡

を求めて、指示稱代詞を使ふのである。  
 同じ指示詞の内でも全て近稱と遠稱がある。這個(これ)とか這些(是等)であるとか、這裡、這兒(此所)などは何れも近くを指示するので近稱指示稱代詞。那個(あれ)とか那些(あれ等)那裏、那兒(かしこ)とかは離れたる所を指示する遠稱指示稱代詞であるが、要するに上に這の字が來るのは近稱、那の字の來るのは遠稱と想へば間違ひはない。  
 一、事物を指示する場合  
 單數 這、這個  
 那、那個  
 復數 這等、此等、這幾個、這些個  
 那等、彼等、那幾個、那些個



例へば

這是誰(此は誰ですか)……………(指人)

這是王先生(此は王先生です)……………(指人)

事情被他弄壞了(這真可惜)事柄は彼のために打ち破られた、此は真に

惜しむ可き事である)……………(指事)

備拿這個去(不要拿那個)君は此を持つて行け、あれを持つて行くに當

らん)……………(指物)

這些都是備的朋友麼(是等は全て君の友人ですか)……………(指人)

備把這些擱在那屋裡去(君は是等をあの室へ持つて、置け)……………(指物)

二、場所を指示する場合

這裏、這兒(此所)這個地方……………(近稱)

那裏、那兒(あそこ)那個地方……………(遠稱)

上記のやうな遠近二例に過ぎぬが、此を一句の内から摘出して見ると

我在這裏找備(那知道備在那兒)私は此所で貴方を探した、どうして

貴方が其所に居ることを知つて居らうか)

傍線の詞が指示稱代詞である。

三、方向を指示する場合

這邊(此の邊)這面(此ちら)這塊兒……………(近稱)

那邊(あの邊)那面(あちら)那塊兒……………(遠稱)

這溜兒(這邊)有姓李的(沒有)この邊に姓李と云ふ方は御座いませんか)

那邊有磚瓦房子(是姓李的)あの邊に煉瓦造の家があるのが姓李のと



こてす

四、時間を指示する場合

這個時候 這個當兒(此の當時)……遠稱

那個時候 那個當兒(あの當時)……近稱

他字が指示代名詞の用をなす場合

原來が人稱代名詞である他字が廣い意味で事物を指示するに用ひられる。

樹上開的很好的花不要折他(樹上に咲いて居るのは大變好い花だ、あれを折つてはいけな)の場合の他の如し。

我很愛這本書(且將他借給我)一看私は大變に此の本が好きだ、君は暫くそれを私に借して見せて呉れ)の他の如きである。

疑問稱代詞

この稱代詞は人事物、地方、方向、時間、數量狀態等に及んで、明瞭に判定して指示し得ざる時に使用する代名詞である。唯前以て注意して貰ひたいのは指示代名詞中の那個(あれ)とか那裏、那兒(あそこ)等の詞が同一文字で那個(どれ)那裏、那兒(何所)等と變化する事であるが、それは指示代名詞の場合は發音が那を去聲に言ひ、疑問詞の時は長く那(なあり)と上聲音に發音するので區別する。それから疑問稱代詞の使用される場合は句尾に邦語で何々かのか字に當る麼の字は決して使用されな

す。例へば

爾上那兒去麼(君は何所へ行くか)と言ふ風になるのは相違て此麼の字は不要である。何所とか何とか幾つとか言ふ字の使用される時



は必ず麼は使用されなす。

疑問稱代詞の使用される範圍を下記して見るから比較研究された

50

人に用ゐらるゝ場合

誰(たれ)那(一位)どなた(那個人)どの人……………單數

誰們(たれ達)那(幾位)どの方達(那幾個人)どの幾人(那些個人)どの人々……………復數

……………復數

事物に用ゐらるゝ場合

那(どれ)那(個)どいつ……………單數

那(幾個)どの幾つ(那些個)どれ位……………復數

場所に用ゐらるゝ場合

那兒(那裏)どこ(那個地方)どの所

方向に用ゐらるゝ場合、那邊(どの邊)那面(どちら)那塊兒(どの方)

時間(どの時間)に用ゐらるゝ場合、那個時候(どの時分)那個當兒(どの時幾時)何時

數量(どの數量)に用ゐらるゝ場合

幾個(多少)どの位

狀態(どの狀態)に用ゐらるゝ場合

怎樣(どう)那個樣(どの樣)

それから此の外に名物詞の前に甚麼と云ふ二字を加へて稱代詞となすのがある。例へば人に對して甚麼人(どんな人)とか、事物に對する甚麼事情(どう云ふ事情)或は甚麼東西(どう云ふ品物)とか、場所に就ては甚麼地方(どう云ふ所)時間に就ては甚麼時候(何時)の如くである。



## 稱代詞の的字に就て

的の字は大體が介詞であるが、習慣上往々にして原來の紹介の役目を果さないで、ものとかこととか言ふ意味をもつて一個の代名詞となる場合がある。

賣花的(的)來了(花賣りが來た)

他買來的是鉛筆不是毛筆(彼の買つて來たのは鉛筆で筆でない)

上記二例の内て賣花的は賣花的人の人が略されて居り、買來的是東西が省略されてる譯で、何れも人とか東西とかの代りとなつて居るのである。次に名物詞に於て説明したと同じ

## 稱代詞の三位

に就てお話をしやう。

主位賓位領位に就ては前述してあるが、名物詞の身替りたる稱代詞にも矢張三位のある事は無論である。たゞ領位たる主物格が稱代詞の時には往々の的の字が略される。名物詞では主物格(領位)に的字を加へるが原則であるが、此の場合には省略される。例へば事物を指示する這張椅子とか那個東西などは何れも的字が略される。また方向や時間を指示する時も矢張的字が略される。

那塊兒樹木多得很(あの邊の木は大變に多い)這個時候(生意很好)この頃は稼業が大變に都合がよい(の場合の如くてある)。

## 稱代詞の主位

我們逛公園去罷(私共は公園へ散歩しやう)



這不是好東西(之は好いものでない)

那一位是王先生(どの方が王先生ですか)

上記三例の内の傍線の施してあるのが主位である。

その賓位

昨天先生告訴他了(昨日先生が彼に話した)

李君不愛這個(李君は此を好まない)

誰誰買了這本書(誰に此の本を買つてやる)

人稱と指示疑問稱代詞の賓位を摘記したのである。

稱代詞の領位

個的(君の本)這裡的(天氣)此處的(天氣)

誰的(罪)誰的(罪)

指示稱代詞の這とか那とか言ふ字は單に用ゆる時は主位であるが賓位に使用される時には這個とか那個とかせねばならぬ。それから疑問稱代詞の甚とか甚麼とか言ふ詞も習慣上主語の位置に来ることはない。また領位としても用ゐられぬ。

練習問題

下句中より稱代詞並びに其の種類を説明せよ

一、這不是個的帽子麼

二、樓上是誰說話的

三、那些不是個的是誰的呢

四、我知道那個是誰



五、這是機密事別和他說話

### 練習問題

下句中より稱代詞を抽出し並にその三位の何れに屬するか説明せよ

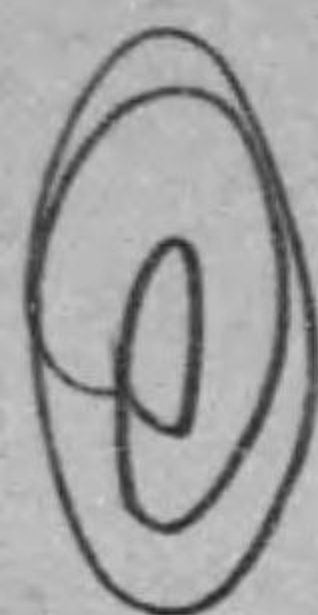
一、我也不知道他也不知道

二、爾先走我隨後就到

三、那買書的姓甚麼

四、在屋子裡有個人他是誰呢

五、中國有兩個政府本是那個是真的



## 第五章 動詞

事物の動作を表示する詞が動詞であるがこれを四種類に區別する。それは

外動詞(他動詞)

内動詞(自動詞)

同動詞

助動詞

である。これから此の四種の動詞に就て詳細にお話をしやう。

外動詞

これは或る者の動作が他に影響し、又は他の動作が受働的にその或



る者に及ぼして來るのであつて、或る者が他の事物或は人より働きかけられた場合に其の事物なり人なりを受事と呼ぶのである。

他打死了一條蛇(彼は一匹の蛇を殺した)

この場合に蛇の如きを受事と言ふのである。大概の外動詞は皆一つの受事を用ゆるのであるが、往々に二個の受事の働きを示す場合がある。その時は一つは物を表示し、一は人を表示して居る場合があつて、この物を表示するのを直接受事と言ひ、人を表示して居るのを間接受事と言ふのである。例へば

他教我中國話(彼は私に支那語を教へる)

他們給這個孩子點心(彼等は小兒に菓子を與へた)この場合の中國話と點心は直接受事、我と小孩子は間接受事である。直接受事と同接受

事的位置は他動詞に密接の關係の有無に依つて生ずる區別であつて、用語上に注意されたいのは其の位置である。受事のことを他動詞の賓語とも言ふて居る。

兎に角、外動詞と云ふのは相手方のある動詞であつて、聽くとか、飛ぶとか、或は晴れるとか、月が出るとか言ふ動詞とは異なつて居る。例へば打つとか蹴るとか言へば打つ物、蹴る物がなければならぬやうな譯で此のやうに相手方のあるのが外動詞である。その相手方を受事と思へば間違ひはない。それから受事に下記のやう五種類がある。

名物詞の受事たる場合

我念書(私は讀書する)の書の如し。

稱代詞の場合



這個人救我出水裡頭此の方が私を水から救つたの我的如きである。

(60)

動詞の場合  
他在白天裡不喜歡睡覺(彼は晝間寝るのを喜ばぬ)の内の睡覺の如きである。

未成句語の受事たる場合

沒有一個人知道怎樣(做)起來(一人も如何して出て来たか知らぬ)の怎樣做起來の如し。

成分句の場合

我們不知道那(一個人)來了(私共はどの一人が来たか知らぬ)の那(一個人)の如きである。

受事の補足語

他動詞に於ける受事がその詞のみで完全に意味を表示せない時に其の補足語と云ふのが使用される。例へば名物詞では他們舉我做議長(彼等は私を議長に擧げた)の議長の如きが補足語である。彼等は私を擧げた許りては何に擧げたか一向分らない、議長と云ふ補足語をして始めて擧げたなる他動詞と我なる受事が完全に意味を持つて来る。

其の他の例に於ても、他(我)了一個金的戒指(彼は一つの金指輪を失つた)の金的と云ふ區別詞。審判(他)受刑(判事は彼の罪あるを判決した)の受刑の如き動詞。我們看見他睡着(私等は彼の睡つて居るのを見た)の睡着の如き形容詞。我們已經教他做這樣事情了(私等は既に彼をして斯かる事をさせた)の做這樣事情了の成分句。我知道這本書是沒有用處(私は此の本が役に立たない)のを知つて居るの沒有用處の如き

(61)



未成句語の受事を補足してゐるのを見て、幾多の受事が各種の補足語に依つて意味が完全されて居るを知らるゝてあらう。

## 内動詞

自動詞のことであつて、その者の動作するのがその者の本身にあつて、他の事物に關係しない。例へば「月亮出來了」(月が出た)とか「鳥兒飛着」(鳥が飛んで居る)の如く、出るとか飛ぶとか言ふのが内動詞である。

此所で記憶すべきは外動詞は必ず影響する受事の前に位置して居るが、内動詞は其等に類はされる事がない。

他打我了(彼は私を打つた)……………外動詞

他跑了(彼は逃げた)……………内動詞

前記二例に依つても分る通り、外動詞の下には必ず何等か相手となる

可き名物詞とか動詞或は其の他の詞が來るが、内動詞は詞が打ち切られる如き活用である。

雲彩散了(太陽也出來了)雲が散つて太陽も出て來た)の散と出來の用法を見ても諒解せらるゝてあらう。次に内動詞の内に入れ可きではあるが、別に

## 同動詞

と云ふのがある。これは動詞でありながら西の動作を表示しなう。

唯一種不動の情景を表示する動詞である。例へば

他是(個)木匠(彼は一人の大工だ)

河裡有(一隻)船(河に一艘の船がある)

前二例中の是(である)と有(ある)の二詞の如きである。この同動詞は



外動詞と同じに其の動詞の下に一種の詞を要することが必要である。しかし外動詞の賓語とは同じでない。同動詞の下に来る詞——前例に於ける是とか有とかの下に在る木匠とか船とか言ふのは補足語と言ふのである。以下各種に就て其の例を表記して見やう。

馬是動物(馬は動物である)……………名物詞

這張紙是紅的(この紙は紅いのだ)……………區別詞

鳥兒叫得好聽(鳥が面白く鳴く)……………形容詞

我們希望的是時價掉下來(私共が希望するのは時價の下落すること

だ)……………成分句

盜賊的家庭是在恐怖裡(盜賊の家は恐怖の内に在る)……………未成句語

助動詞

動詞の上に加へて其の動詞の意味を完成させるのであつて、其を性質から區別して左記の六種とする。

可能的助動詞

この種の助動詞は自己の力量の到り得る所を表示するのであつて、例へば能(能)とか會(能)とか可以(出来る)得(し得る)……………などが其である。

能 備一刻鐘能寫多少字(君は十五分にどの位字が書けるか)

能殺 這個工人很能殺(辦)事(この職工は大變に仕事をする)

會 備會說中國話麼(君は支那語が話せるか)

可 這條胡同可走嗎(この横町は行けるか)

可以 備可以一同去麼(君一緒に行く事が出来るか)

得 那種話我們說不得(あの様な話は私共には話し得ぬ)



修

這點錢修買那本書麼(これ位の金であの本が買へますか)

希望的助動詞

この種の助動詞は希望とか動作を遂行する意思を表示するのであつて、要、想、願意、打算、預備……等である。

要 我立刻要回家去(私は直に家に回らう)

想 他想坐飛行機(彼は飛行機に乗らうと想うて居る)

願 他願做這件事(彼は此の事をなすを願ふ)

願意 李兄願意辦那件事(李君はあの事をなすを願ふて居る)

打算 備打算做甚麼(君は何をなす積りか)

預備 我預備今天走身(私は今日出立するつもりである)

指定的助動詞

この類の助動詞は一種の動作とか或る事物の意思を指定する如く表示するのであつて、得、肯、要、屑……等である。

得 備還得歇一會兒(君はまた暫く休め)

肯 他肯去上學麼(彼は學校へ行くことを承知したか)

敢 有勇氣的敢說那樣的話(勇ある人で敢てかの如き話が言へる)

屑 屑那種齷齪的人(李君不屑和他同事(かのやうに齷齪する人とは李君は事を共にするを屑しとせない))

要 我要讓他做主的(私は彼に主となるを譲らうと思ふ)

可 那女孩兒可愛得很(あの女兒は大變可愛らしい)

可以 備今天可以就回家(君は今日直に家へ歸ることが出来る)

該 備該去走一邊(君は一度行く可き筈だ)



應該

他今天應該回來(彼は今日回つてくる筈である)

應當

做學生的應當遵守學堂的章程(學生たるものは校規を守る可きである)

須得

國民須得有自治的精神(國民は須く自治の精神を持たなくてはならぬ)

不必

不必備自己去了(君自身に行くには當らん)

不要

不要備做這些事了(君はこのやうな事をなすには及ばぬ)

不用

備不用害怕(君怖れるには當らない)

それから此の外に將然——將にかくくにならうと云ふの指定する會の如き、例へば他會到這裏來(彼は此所へ來る事が出来る)とか、或は然らんと云ふ、輕い程度の指定を意味する許の如き、例へば他許和他の女

朋友結婚(彼は彼の女友と結婚するかも知れない)の如きである。次に使役的助動詞

に就て説明しやう。この類の助動詞は使役と役使されるもの、意思を表示するのであつて

例へば(教)何々をしてとか使打發……等である。

教 教他到這兒來(彼をして此所に來さす)

先生教我進去(先生が私を入らした)

前二例は主使——使役する例と、被使——役使された場合の使用法である。

使 使他買東西(彼をして品物を買はせた)

主人使我買東西(主人が私をして品物を買はせた)の如きも前



二例の通り主使と被使の用法である。

打發 打發那些人出去(あれ等の人を出立させなさい)と先生打發我  
告訴備的(先生が私を寄越して貴方に話させた)の二例も使ふのと、使は  
れる場合の用法別である。

#### 否定的助動詞

この類の助動詞は事物の動作を否決する意思を表示するのであつて、不、沒、別の如きがそれである。例へば

不 今天一定不下雨今日は屹度雨が降らない

沒 他還沒回來(彼は未だ回つて来ない)

別 備別胡說(冗談を言ふな)

#### 受身的助動詞

これは他より起された動作を表示する、つまり受働的なのであつて、被とか教……などが其の例である。

被 這一次我真正被騙了(今度は私は眞統に騙られた)

教 那輛車子教馬牽了(あの車は馬に牽かせた)

見 我的罪望備見赦(私の罪を君が赦されんを望む)

挨 這賊已經挨打(此の賊は既に打たれた)

#### 助動詞の位置

全ての助動詞は助くる動詞の上に位置されて使用するが、たゞ得の助動詞だけは動詞の下に来るのである。それから今迄説明した動詞全般に涉る用法であるが、動詞が單獨で用ゐられる場合は大連是滿州的通商口岸大連は滿州の開港場であるとか我今天念書(私は今日讀書



するの是(ある)とか念(讀む)の類である。動詞が重ねて用ゐられると、命令を意味する。例へば、爾想想究竟對不對(君、つまり合つてゐるかどうか想へて見給へ)或は爾看看爾自己的事業(君自身の仕事を見なさい)の如く、聽一聽(聽け)辦一辦(なせ)……等がそれ、重用する際には大抵一が略されて、聽々、辦々として使用される。更に動詞が助詞を加へて使用される時、把字の場合、下記のやうになる。

把門開開(門を開ける)

把桌子擦一擦(テーブルを拭け)

他把一張紙夾在書裏(彼は一枚の紙を本の中に夾んだ)

把字は邦語のテニヲハのヲの字と同じであるが、これは命令の動作や行爲を表示する時に使用されると、前二例のやうに、爾(君)の字が、大概省

略されることもある。尙助辭の給字を用ゐる時は、爾給我抄下那本書(君は私にあの本を寫して來て呉れ)とか我昨天給爾買一件衣裳(私は昨日君に一枚の衣物を買つてやつた)などがそれ、よく其の用法を注意せられたい。

動詞が助動詞を加へて、疑問的意味に否定的意思を加へる場合には下に記する様な用法がある。

這樣價錢賣不賣(この値で賣るかどうか)

王君來沒來(王君は來たか)

爾今天上學不上學(君は今日登校するかせぬか)

他回家不回家(彼は歸宅するかどうか)

動詞と時間の關係



動詞の現在過去未來の三法式は下に記する如くである。これは支那語では誤り易き場合が多いからよく熟讀せられんことを希望する。

## 現在形

動詞下に着の字の來るのが現在何々をしつゝある場合を指すのである。着は著とも書く。

尙哪字も現在形につく場合が多い

我聽着唱戲哪(私は芝居を聽いて居る)

爾在這兒看着甚麼(君は此所で何を見て居る)

我在火車上坐着(私は汽車に乗つて居る)

## 過去形

普通過去形の動詞——過ぎ去つた時を示すには了字を加へる。例

へば

他回了家了(彼は歸宅した)

他到學堂去了(彼は學校へ行つた)

この外に特別の過去形が二種類ある。それはずつと以前——全過去を表す場合、動詞下に過字を附加して其の意味を表示する。

我見過他一次(私は彼と一度遇つたつけ)

他來過一回了(彼は一度來た)

それから半過去——現在完了式の用法は動詞の下に着了の二字を附加する。例へば

他睡着了(彼はねむつた)

## 未來形



動詞の未來形——まだ來らぬことを、或は來らんとする將來のことを表示するには動詞の上に要字を附加する。

我要洗澡(私は入浴をしやう)

我要上街去(私は町へ行かう)

この要字も單獨に用ゐられる我要一條手巾(私は一本手拭が入用だ)の如くであると、需要の意味で現在形になるが、動詞の上に用ゐられると未來形となる。

この外に特別の未來形がある。それは罷字であつて、この字が句末に加へられる時、動作不定を表示する。例へば

今天爾留在這兒罷(今日君は此所に滞在するてしやう)

階們明天一同去罷(私共は明日一緒に行きましやう)の如きがそれだつ

まり罷字は不定のでしやうの意味を持つて居る未來形を表す字である。

#### 動詞の懸態

動詞が名物詞の性質を持つ場合

這個人是昨天來的(此の人は昨日來た方だ)

那個柿子是爛的(あの柿は熟して居るもの)

動詞が區別詞の性質を持つ場合

飛的鳥(飛ぶ所の鳥)

吃飯的時候他到這兒(御飯時に彼は此所へ來る)何れも的字的來る時に

變ずるのである。

それから最後に



## 外動詞の兩式

に就てお話をする。これは主動式と被動式であつて、實際に動作の主體となるものが、句の組織上に於ける主語と一致する時に其を主動式と云ひ、反對の時を被動式と云ふ。同一事實でありながら用法が異なつて来る。

## 主動式

牧童斫了那枝梅樹(牧童があの梅を切つた)

協約國打敗了德國(協約國が獨逸を敗つた)

## 被動式

那枝梅樹被牧童斫了(あの梅は牧童に切られた)

德國被協約國打敗了(獨逸は協約國のために敗れた)上記四例を比較し

て研究されたい。

## 練習問題 六

下句中より動詞の種類を挙げよ

- 一、他來了我便不去了
- 二、他是誰
- 三、他願意做那件事嗎
- 四、爾有兒子麼
- 五、李兄也能殺去嗎
- 六、我們只應該做有益的事業
- 七、爾聽見鐘聲沒有不是外面發了火嗎

動 詞



動詞の散動式

こゝに叙述の役目をなさない動詞がある。それを散動詞と云ふので下に記するのが其である。

來、笑、跑、哭……………内動的散動

穿衣、送書的朋友……………外動的散動

是人、有幸福……………同動的散動

可以讀書、被騙……………助動的散動

上記の如く各種類に於て、名物詞の役目をなし或は形容詞に、又は副詞として動詞が活用される。

散動詞の名詞となる場合

主語の變態

吃飯是不容易的事(御飯を喰べる事(生活)は容易でない)

念書可以使人增長智識(讀書は人をして智識を増長させる)

賓語の變態

我不愛來(私は來るを好まぬ)

人々都希望有幸福(人は全く幸福なのを希む)

補足語の變態

這簡直是騙人了(此は全くかたりだ)

那婦人極力禁止他的兒子哭(かの婦人は極力彼の子の泣く事をとどめた)

散動詞の形容詞となる場合

讀書人、守錢奴、失信、賣國賊、勞働的婦人、被閉鎖的工場(閉鎖された工場)



願意做的事(願意の事)能毅辦事的人物(十分任事し能ふ人物)無信用的行爲(不信用の行爲)

散動詞が副詞となる場合

李先生竭力的研究言語學(李先生が極力言語學を研究する)

校長發怒責備他的學生(校長が彼の學生を憤怒叱責した)

## 第六章 區別詞

これは形容詞のことである。普通四種類に區別してあるから其に従つてお話をしやう。その四種と言ふのは

性狀區別詞

數量區別詞

指示區別詞

疑問區別詞

であつて、先づ性狀區別詞からお話をする。

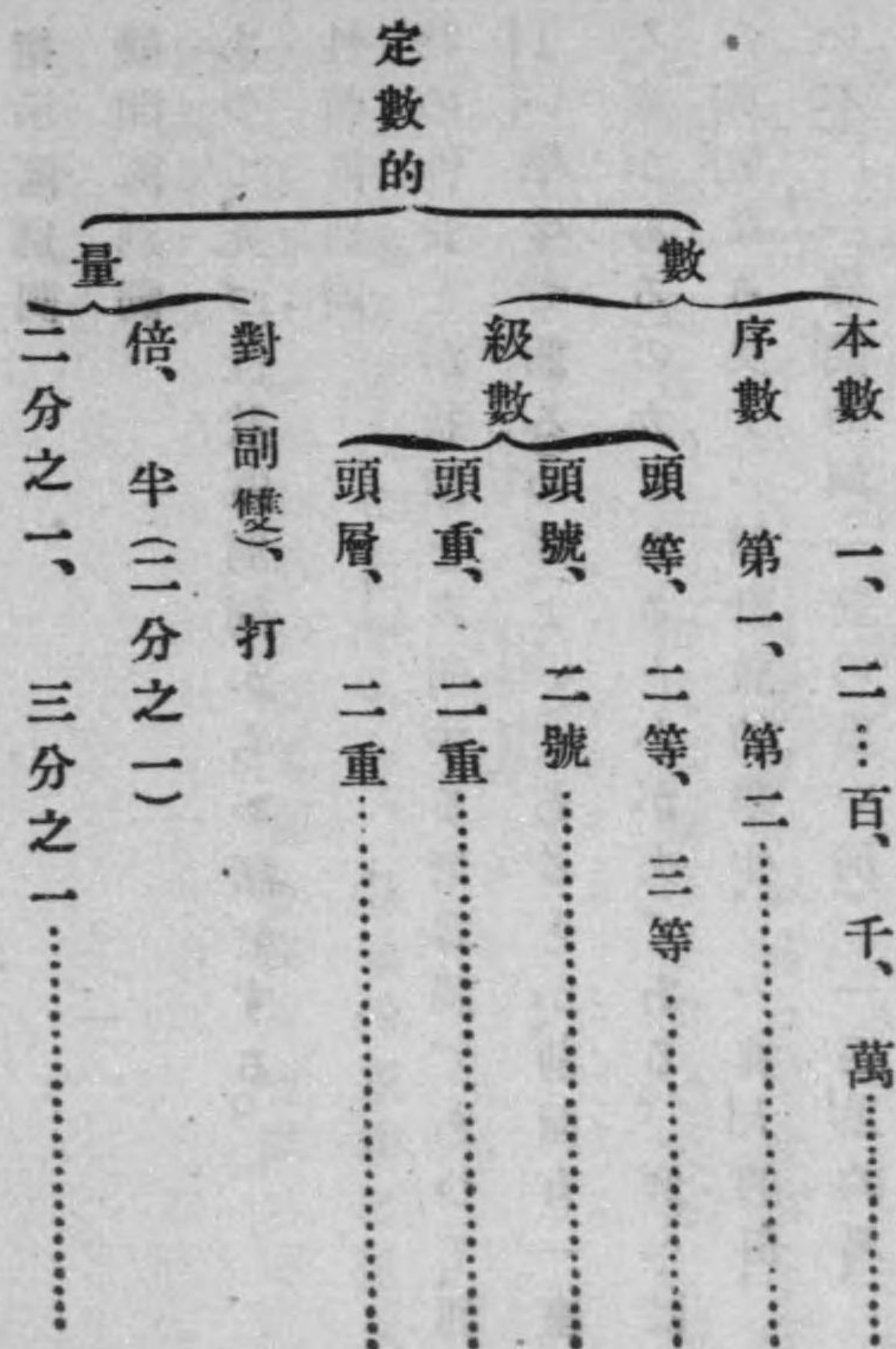
性情區別詞

事物の性質とか状態を表明する形容詞であつて、那是一個好學生(あれはよい學生である)の好(よい)であるとか、前面有一座大樹林子(前方に大きな森がある)の大であるとかが夫である。例へば一個勇敢的兵丁(一人の勇敢なる兵士)一個勤勉的學生、一塊大的田、一本厚的書(一冊の厚い本)、一條闊的河(一筋の廣い河)、一匹黑的馬、一條肥的狗(肥えてる犬)一把短的劍(一振りの短い劍)の傍線の施してあるのが其である。

數量區別詞

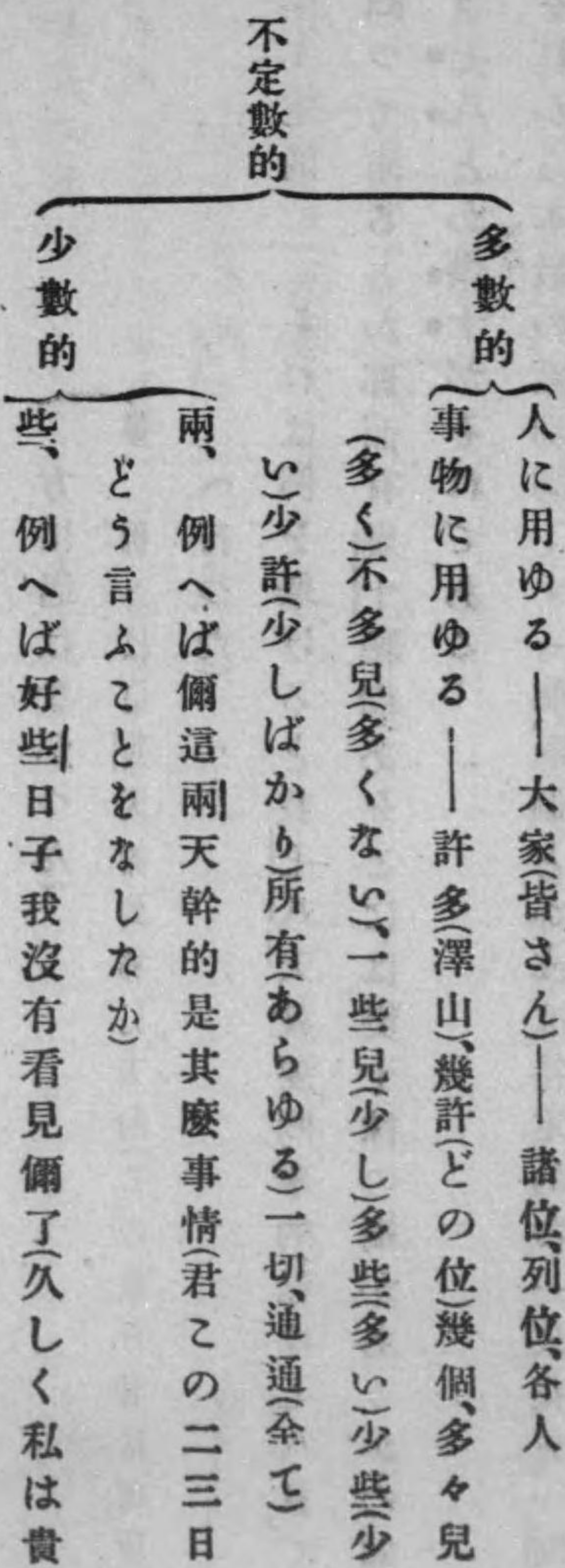


事物がどの位あるかと言ふ數量を形容するのであつて、單に數詞と言つても定數と不定數との二種がある。



級數的に用ゐらるゝ時には一は皆頭字を使用する。即ち何等とか何號とか何層、何層の時の如きは皆頭等、頭號、頭重、頭層と言ふのである。次は不定數的と、半不定的のとしてあるが、其等も左表の如くである。

(成) 十分之一 (分) 百分之一 (釐) 千分之一 ……





方に遇はなかつた  
幾、例へば這幾天備到那兒去的(この數日君は何所へ行つた)

半不定的 それは例を擧げると、我七八天就要回來的(私は七八日て回つて來るとか那面有幾十顆樹(あそこには幾十株の樹があるか)の如き七八とか幾十がそれである。)

それから本數の區別詞——一個、兩個とか或は特定の的一朵花兒、一間屋子の如き朵とか間の如き數、陪伴詞の事は既に名物詞の所で説明して置いた。序數詞の第一、第二の如き又は分數詞の三分之一、五分之二などは別に取り立て、説明はしないが、何れも區別詞である。

指示區別詞

これは那、這、這些等の指示稱代詞と同じ字であるが、是等の下に名物詞が直にくる時には其が指示區別詞となる。例へば

這是李先生的書……………指示稱代詞

這書是李先生的……………指示區別詞

これは李先生の本である。この本は李先生のであるの以上二例を比較せられたい。

這麼、那麼

單數 這樣、那樣

這麼樣、那麼樣

復數 這等、那等

總指と逐指



指示區別詞が全體を總指する場合、譬へば所有的人類都應該勞働(あらゆる人類は全て勞働す可き筈である)他不願意看一切的人(彼は一切の人に遇ふを好まぬ)の内の一切的、所有的が總指である。それから逐指とは個別的のものであつて、每個人有一管筆(人毎に一本の筆を持つて居る)、各種事情他都能辦的(各種の事は彼は全て爲し能ふ)の每とか各がつまり逐指區別詞と謂はれる。

旁指と虚指

指示區別詞が本身や事項を指示形容する以外に他の事を指示し、或は指示することを知らず、又は願はない時に虚指區別詞が使用される。例へば旁人的自由我們不能干涉(傍人の自由は我々は干渉せない)別的事且不說(外の事は暫く言ふな)看看了一篇其餘的文字也(就可想而知

了(この一篇を見て其の餘の文字も直に想知し得らる)の旁別、其餘的が皆旁指區別詞で、某人幹了某事(某がある事をなした)の某の如きが虚指である。

疑問區別詞

これは何字以外に甚、甚麼、那、幾個等があるが、那字は疑問稱代詞の時と同じく上聲音の場合である

他是何人(是從那地方來的)彼は何人か何所より來たものか)

這是甚麼衣服(此はいかなる衣物か)

爲甚麼緣故他昨日沒到學校來(何う云ふ譯で彼は昨日學校へ來なかつた)

代用區別詞



名物詞や稱代詞が區別詞となる場合

中國的言語支那の言語我的書(私の本)

玻璃的罩兒(ガラスのホヤ)我的兒子的先生(私の子供の先生の)内て元來が名物詞や稱代詞である詞が區別詞の役をして居る。

動詞が區別詞となる場合

受傷的兵(負傷した兵)叫的狗(なく犬)

未成句の區別詞

直挺々の、隱々約々、明々白々、熱烘々の、油光々の、臘黄々の、雪白々の……等があるが、名物詞の上に来て用ゐられる場合と、その下に活用される場合とがある。譬へば

亮煌々の燈火(光り煌々たる燈)

很髒的東西(大變汚いもの)

空房子(空家)好天氣(好天氣)

その下に用ゐられる場合は價錢公道(價が公平だ)今天雨很大(今日大雨)雨が降つた(這張紙是紅的)(この紙は紅いのだ)

次に區別詞が名物詞となり、動詞となる變態例の二三を例示して置かよ。

冷的我不要吃(冷いものは私は喰べぬ)

這件衣裳的長短(爾知道麼)(この衣物の長短は知つて居るか)

田裡的麥都黃了(田の麥が全て黄くなつた)

鍋裡的水熱了(鍋の水が熱した)

上記四例中の長短の如く意義相反せるものを重ねる時には大抵名物



詞となる。黒・白とか、寛・窄とかの如きも然りである。

區別詞の二種用法と比較法

原來が前述して來た通りに區別詞は名物詞を形容するのであるから、屹度名物詞を伴ふて居るが、性情區別詞と一部の數量區別詞とは省略されて居る。未成句の區別詞の末尾で説明してある通り、名物詞の上下によつて、使用法が異なつて來る。

東邊有一個大樹林子(東に大きな森がある)

他的聲名很大(彼の聲名が大變大きい)

それから比較法の三種類に就てお話をしやう。

平地級、差比級、最上級がそれであつて、事物を比較して彼此相同じ場合を形容するには、我的心思和水一般、平私の心は水と同じに平らかであ

る工人的臉黑得炭一樣、職人の顔は黒くて炭と同じだの如く一般とか一樣とか云ふ詞を附加して平地級を表示する。事物を彼此比較して其の差を表示する差比級としては、這個比那個更好(これはあれに比べて更によい)、他比我強壯些(彼は私に比べて少し強壯である)のやうに更と言ふ副詞を添へ、些字を附加する。更に最上級を示すには副詞の最とか頂の字を加へて其を明白にする。他是我的朋友裡頂窮苦(彼は私の友人の内が一番貧乏である)這一班裡頭他是跑的最快(この組の内では一番早い)の如きである。

練習問題 七

下句中より區別詞の種類を摘示せよ



- 一、這是一本很好的書
- 二、那隻船走的快
- 三、馬建忠是用外國文法研究中國文的第二個人
- 四、他一切的事都不問只管念他的書
- 五、爾天々兒看中國的報廢
- 六、我將所有的書都賣掉了
- 七、一間大屋裡點着許多燦爛的明燈

### 第七章 疏狀詞

疏狀詞とは副詞のことである。これには普通の疏狀詞、特別的疏狀詞、疑問的疏狀詞の三種類がある。其等を次に一々例示して説明する。

#### 先づ第一種類の

##### 普通の疏狀詞

であるが、これには時間に関するもの、場所に関するもの、數に関するもの、分量と程度、性狀と事件、諸否に関する六項目に分類してお話をする。

##### 時間に関する疏狀詞

- 従前 他従前沒來的(彼は以前來なかつた)
- 以後 爾以後不要去了(君は以後來るに及ばぬ)
- 將來 將來求悠多指教々々(將來貴下の御指教をお願ひする)
- 上回 上回我告訴爾的(前回に私は君に告げたのだ)
- 近來 近來爾好啊(近來君は御氣嫌がようございますか)
- 起初 他起初性子很溫和了(彼は最初は性質が大變溫和であつた)



剛纔 他剛纔走了(彼はたつた今出た)  
 已經 我和爾已經不見了(私は君と既に一年遇はなかつた)  
 曾經 爾去後他曾經來過一盪(君が去つて後彼は曾て一度來た)  
 立刻 他立刻回來的(彼はすぐに歸つて來た)  
 趕快 爾只趕快用功(君は唯一生懸命に勉強せよ)  
 便 我從家裡便到這兒來了(私は家から直に此所へ來た)  
 就 他就要動身了(彼は直に出立した)  
 還 他還沒畢業(彼はまだ卒業をしな)  
 常 他常到戲館子裡聽戲(彼は常に劇場へ行つて芝居を見て居る)  
 天々 我天々來找爾了(私は毎日來て君を探した)  
 先 爾先走(君先へ行つて呉れ)

後 我後到十分鐘(私は十分間後れて行つた)  
 早 今天他起的早(今日彼の起きたのは早い)  
 晚 他到這兒太晚了(彼の此所へ來たのが餘り遅れた)  
 快 他快走了(彼はぢきに行つた)  
 早已 這件事情我早已知道的(この事は私は早くから知つて居る)  
 昨天 昨天爾往那兒去的(昨日君はどの方へ行つた)  
 今天 今天上那兒去(今日はどこへ行くか)  
 明天 明天打算上北京(明日は北京へ行く積りだ)  
 場所 場所に関する疏狀詞  
 裏邊 爾在裏邊做甚麼事情(君は内に在つて何をなして居るか)  
 中間 中間兒是車道(中央が車道である)



前邊 前邊有一隻馬跑着哪(前方に一匹の馬が走つて居る)  
 右邊 右邊有一頂橋(右側に橋がある)  
 傍邊 柳樹傍邊站着(一個姑娘(柳の側に一人の娘が立つて居る))  
 四周 爾在那塔上看見四周罷(君はあの塔上で四方を眺め給へ)  
 南邊 他的家在我學校的南邊(彼の家は私の學校の南にある)  
 底下 夏天樹底下很凉快(夏の樹の下は大變に涼し)  
 上頭 他後頭站一個人了(彼の後に人が立つてる)  
 外頭 門外頭嚷々的是誰(門外で騒いでるのは誰か)  
 遠方 這是遠方來的客人(これは遠方より來た客だ)  
 鄰近 在我家鄰近(私の家の近所)  
 數に關する疏狀詞

初次 我和爾初次見面(私は君と始めて遇つた)  
 屢次 他屢次來(彼は度々來る)  
 無幾 費用很大(餘下銀錢無幾了(費用が非常にかゝり餘分の金は殆んど無い))  
 終 那天終沒看見爾了(あの日は終に君を見なかつた)  
 有時 他有時懈怠(彼は時折に怠ける)  
 常常 他常常犯過失(彼は常に過失をする)  
 第一次 這是第一次得的獎品(此は第一番の受獎品である)  
 單獨 他單獨開舖子了(彼は單獨で店を開いた)  
 又 此刻又起風了(此の時間に又風が起つた)  
 再 爾下回再來罷(君はこんど又來給へ)



頗 他近來頗有聲譽(彼は近來頗る聲譽がある)  
 還 他還有一個兒子(彼は尙一人兒供がある)  
 一番 爾努力一番(君は努力一番せよ)  
 分量と程度に關する疏狀詞

很 這朵花很好看(この花は大變によろ)

頂 他做事很認真(彼は事をなすに大變眞面目である)

甚 在這兒的人甚少(此所に居る人は甚だ少い)

怪 他近來怪不高興(彼は近來さつぱり興がのらぬ)

太 爾太不留心(君は不注意すぎる)。太是很よりも悪く過ぎる

更 如果這樣做更不好了(果してかやうになせば更によくない)

最 我最喜歡私是最も喜んで居る)

極 爾違背法律極不妥當(君は法律に違背するは極めて妥當ならず)

格外 爾買的書格外賤了(君の買つた本は格外に安い)

大概 這種價錢大概一樣的(このやうな値段は大概同じである)

大約 他大約下月走罷(彼は大概來月出立するだらう)

所 我所有的東西給爾罷(私の有する物は君にあげやう)

全 他的家人全去了(彼の家人は全て去つた)

都 各種貨都加了稅了(各種の貨物は全て加稅された)

多 到那兒有多遠(あそこ迄どの位の道程があるか)

大半 他辦了大半了(彼は大半をなした)

幾許 他有幾許地面(彼はどの位の土地を有するか)

略 在山上略有些樹木(山上には大抵幾らかの樹がある)



差不多 電車和汽車差不多快(電車と自動車と早さは同じ位である)  
 性情と事件に關する疏狀詞  
 恐怕 這樣做法恐怕要錯哪(此のやうな仕方では間違ひ易いのを恐れる)

一定 他一定到這兒來(彼は屹度此所へ來る)  
 的確 他的確沒有說謊(彼は正しく偽りを言はぬ)  
 特地 先生特地給我一個獎章(先生が特に私へ褒獎を下された)  
 必 (這是必經的階級(此は必ず通る階級である))  
 眞 (這是真好(此は眞統に好い))  
 竟 他竟是用無用(彼は唯無用である)  
 還 價錢雖貴(質料還好(値段は高いが質が又好い))

實在 他說的話實在不錯(彼の話は實在誤つて居らぬ)  
 直 我直到這兒(私は眞直ぐに此所へ來た)  
 另外 爾另外坐一輛車(君は別に俥に乗り給へ)  
 殼 今天殼用了(今日用ゆるに十分だ)  
 隨便 爾隨便喝茶(君随意にお茶をお飲み下さい)  
 便當 道兒遠實在不便(道が遠くて實際に不便だ)  
 白 今天白忙一些兒(事沒有做好(今日無駄に忙しい計りて少しも好い事が出來ぬ))  
 這麼 爾看戲沒這麼好事(君は芝居見に行く此のやうな好い事があらうか)  
 那麼 照那麼說起來(あれに依つて話して呉れ)



好些 他現在是比以前好些了(彼は現在以前に比べて餘程よゝ)  
 諾否に關する疏狀詞

不 他不來了(彼は來なゝ)

是的 是的備說話切實得很(さうだ、君の話は大變確實である)

不是的 不是的備不必多講了(いけん、君は多く話すには及ばん)

不錯 不錯備說對了(さうだ、君の言ふ事は合つて居る)

誠然是 這張畫誠然是像範本一樣(此の畫は誠に手本と同じやうだ)

沒 他沒來(彼は來なかつた)

非 這非畫出來的畫(此は畫いた畫でなゝ)

無 這舖子裡無有了(此の店には無ゝ)

不然 不然他不肯去(然らざれば彼は行くを肯ぜなゝ)

次に疏狀詞の第二種類である

特別的疏狀詞

に就ても話をするが、之はさう澤山の詞はなゝ。例へば

極了 梅花好看極了(梅花が大變よゝ)

得了不得 喜歡得了不得(嬉しくて耐らなゝ)

得很 這件東西貴得很(此の物は大變に高ゝ)

得利害 今天冷得利害(今日は大變に寒ゝ)

この場合に於ける了字は發音を上聲でリアオと言ふのである。尙比較の性質を含んで居るのである。

多了 今天比昨天暖多了(今日は昨日に比べて餘程暖ゝ)

得多 備比他跑的快得多(君は彼に比べて走るのが餘程早ゝ)



一點兒 這表比備的快一點兒(此の時計は君のに比べて少し早)  
次に疏狀詞の第三種類である

## 疑問的疏狀詞

をお話すると。それは下例のやうに

怎的 怎的王兒沒來呢(どうして王君は來なかつた)

幾時 幾時到這兒來(何時此所へ來るか)

那麼 備會照那麼做(君はどんな風に作れるか)

幾 備到過北京幾回(君は北京を何回通つたか)

多少 備買了多少了(君はどの位買つたか)

那兒 那兒有道路(何所に道がある)

怎麼 怎麼他不來(どうして彼は來ない)

甚麼 備想甚麼好(君は何が好いと想ふか)

何 何不就去(何ぞ行かざる)

爲甚麼 爲甚麼不去(何のために行かないか)

難道 難道不好看嗎(どうして見難からうか)

可不是麼 可不是麼(備有理了)いかにも君に道理がある)

これで疏狀詞の大略をお話したのであるが前に挙げた例は一部分に過ぎない。一種の詞で澤山の變化があるし、殊に普通は區別詞とか動詞の上に来て用ゐられるが、往々別に一種の疏狀詞は動詞の下に用ゐられる時がある。

例へば下記するやうに(備拿開這個罷(君之を持つてくれ)備用過飯沒有呢(君御飯を喰べましたか)他的心事我已經看透了(彼の心は私が看過



した等の如きのがある。其等は各自が用ゐる場合に注意せられたい。

練習問題 八

下句中より疏狀詞の種類を挙げよ

- 一、他果然來了麼
- 二、李先生一盪我都沒有會著
- 三、爾且稍微等着我和他說兩句話便來

第八章 助詞

助詞

助詞は名物詞或は稱代詞を紹介する役目をするので、紹介する動詞區別詞等は上に在り、紹介される名物詞等は助詞の下に来るのが普通の用法である。つまり其の用法の上から三種類——前置助詞、句末助

詞、一般助詞に分類して此から説明する。

前置助詞

この類の詞は何時も名物詞や受事的稱代詞の前に来て、人とか事物、その話に關係ある事を表示するのである。

場所に用ゐられる助詞

- 從 他從上海來(彼は上海から來る)
- 到 他到學校去了(彼は學校迄行つた)
- 在 他座在椅子上(彼は椅子に座つて居る)
- 上 他上那兒去(彼は何所へ行くか)
- 往 爾往甚麼地方走(君は何れの方へ行くか)
- 離 離這兒多少里地(此所から幾里あるか)



打 打那兒來何所から来る)

由 由天津來的(天津から来たものだ)

向 這孩子向那裏走(此の子は何れへ行くか)

上記の内て何れへと言ふ内て上と到の區別は上は何所へへの方に當り到は何所へまでのまで。それから往と言ふのは何所への方と言ふ確然と行く場所の判然してない場合に用ゐられる。  
時間用ゐられる助詞

至 他至今沒回來(彼は今になつても歸つて來ない)

當 當冬天的時候兒(冬になる時)

自 自九點鐘開會了(九時より開會した)

從 從下午一點鐘起(午後一時から始まる)

到 到那時候備一定要來的(その時になつて君は屹度來なくてはならん)

情形に用ゐられる助詞

給 他給我做事(彼は私のためにして呉れる)

就 我就不管了(私は即ち管せない)

把 把那個給備罷(あれを君にやらう)

和 我和他意見不同了(私と彼と意見が合はぬ)

跟 他跟我出去買東西(彼は私について物を買ひに行く)

同 爾同他不要淘氣(君は彼と同じに惡戯をするな)

與 這事與我不相干(此は私と相干せない)

連 連我也不知道(私ですらも知らぬ)



比 備比他老得多(君は彼に比べて大分老けてる)  
用 這是用甚麼做的(これは何でこしらへてあるか)

句末助詞

了 備這樣做法真惡極了(君此の様な仕方は真に惡む可きである)  
的 家裡的人也來看的(家の者も來て看やうとして居る)

それから句末助詞の内て罷字は幾分希望を意味するのと、推測を意味する二種用法がある。例へば備去做事情罷(君は行つて仕事をして呉れるてしやう)と、要下雪罷(雪が降りさうてしやう)の二例を比較された。

呢字も説明を助ける場合と疑問を意味する時との二用法がある。例へば在那野地方牲口很多馬呢(牛呢羊呢豚呢)都有(野原には家畜が澤

山居る馬だの、牛だの、羊、豚が全て居ると、備到那個地方去呢(君はあの土地へ行くのか)の二例の如くてある。

哪字は現在の事物の進行を表現する時と、動詞に代つて答詞を意味する場合がある。それは這是我們的幸福哪(此は私共の幸福である)と、還沒哪(まだです)の二例の如くて、後者の場合は全てに應用される。

啊字も疑問を表す時と、意思を強める役目を果す事がある。例へば這是誰的東西啊(此は誰のものか)と、我沒有做啊(私はなさなかつた)の如く、此の場合に啊字のあるのは無いのから見ると更に一段強く言つた事になる。

呀字も感動して發する場合と、命令を意味して使用するのと二用法がある。這件事情實在不奇怪呀(此の事情は實際奇怪ではないか)と言ふ



のと快走呀(早く走れよ)の如く命令するのである。  
 哩 怪不得他立刻要死哩(道理で彼は直に死なうとしたのだ)  
 啦 我們所要做的事真多啦(私共の爲さうとした事は眞統に多いのだ)  
 嗎 今天的戲好嗎(今日の芝居は好いか)

## 一般助詞

これは單に的の字だけであるが、随分澤山の用法がある。例へば名物詞の主物格を表示する父親的帽子(父親の帽子)。稱代詞の主物格を表示する場合、我的書(私の本)。名物詞を略する時に使用する這是我們學生的(此は私共學生のものである)——つまり學生の何々と云ふ品物の名が略されて居る。稱代詞が略されて居る時は備看見的(都是他的)君が見たものは全て彼のものである)——此も備看見の下に稱代詞

が略されて居る。區別詞——形容詞が名物詞の用をなす場合に白的好黃的(不好白いのは好い黄色いのは好くない)の如きである。動詞が名物詞の用をなす場合、買來的(備要麼買つて來たのは君は要するか)。動詞が疏狀詞の用をなして得字と意味が同じ場合、備看的(明白嗎君は明らかに看得るか)。動詞が變じて疏狀詞の用をなす場合——前邊來一匹高大的白馬(前方から來る一匹の高い大きな白馬)。動詞が過去の意味を表示する時に的の字が用ゐられる。我前天看見的(私は一昨日に見た所のものである)の如きである。

助詞は大體に於て前述のやうに區別するのであるが、これを介詞と助詞とに分類することも出来る。それは普通助詞の方は叙述助詞として哩、叭、啦、等。命令助詞として罷、字。疑問助詞としては嗎、麼、呢、等。感



數助詞として啊と呀等である。尙介詞としては所有格を表す介詞としての的。用途を表すものとして拿、把、將、用等。對象とか共同を表示するのに對、向、替、給、和、同、跟等。起點と趨向と原因、結果を表示する介詞として從、由、打、到、向、上、往、朝、望、因、爲、因、爲、到、得、的、等である。それから時間や地位を表すものとしては當、在。代意を表すのは替、代、等。受勸的介詞として被、給、讓。比較級を表示する介詞は比、似、如、等である。以上は前述助詞の所を熟讀せられた時に區別の相違はあるが其の用途に就ては了解せられて居る事と思ふ。餘り煩しい分類法よりは助詞に包めて研究する方が便宜である。

## 練習問題 九

下句中より助詞と其の種類を摘出せよ

- 一、他們不要再鬧了罷
- 二、今日的功課完了事啦
- 三、昨天這裡下了雨麼
- 四、好了天氣涼爽了呀
- 五、這次我被朋友說輸了
- 六、他因爲水土不合由這裡往南京去了
- 七、當春天的時候花究竟爲甚麼要開鳥究竟爲甚麼要叫呢

## 第九章 連詞

連詞とは接續詞のことである。これは各詞を連接し、各句各節の詞を聯絡するのであつて、單獨と連鎖をして居るのとの二種類に區別す



るが、それは各詞語に就て例を擧げて其の用法を下に記して見る。先づ意義の上から之を區別してから後に單獨連詞と連鎖連詞の用法をお話しやう。

共同を表示する和と同(同じに) 跟(ついて) 以及(に)との如きがあるが、例へば我和他辦事(私は彼と仕事をする)とか鯨同魚不是同類(鯨と魚は同じ類でない)である。それから選擇を現すものに或とか或者と言ふのがある。王君或者李君總要去(王君が或は李君かどうしても行かねばならん)の類である。結果を表すのに所以(そこで) 因而(よつて) 那麼(そこで) 等のがある、他用功太過所以得了腦病(彼は餘り勉強し過ぎたそこで腦病になつた)。 爾不肯吃藥那麼怎麼能殺好呢(君は藥を飲むのを肯じないで、其ては什麼して好くならうか)の二例の如きが其である。

轉換する意を表すのに但是、不過、却是等がある。這本是一件要辦的事、但是這時候還太早(此は本來なす可き事であるが但しその時機が尙早すぎる)。 不過小意思(ほんの志に過ぎない)。 雖然他有學問却是辦不好的(彼は學問はあるが却つてする事が悪い)の如きである。推宕をするのには雖然けれども縱然(たとひ) 縱令(たとひ)……あらしむる(就令) 即ち……ならば等があるが、その例は雖然這事不容易我們還須得做去(これは容易ではないけれども私共は又是非爲ねばならない)。それから最一つ就令の用法を示さう。

就令他不來、爾也要去的(即ち彼が來ないなら君は又行かなくてはならない)。 假設を示す若しとか假りにとか言ふ意味の若使、假設、假如、設或、設若等も連詞の一種であるが、假使他不來、不會誤了事麼(假りに彼が來



ないとしても事を誤らなかつたか。若し不願意走備不必管了(もしも彼が行くを願はねば君は構はずに置け)。前後の句が關聯を深く表示するのに不單只……而且、還……而況、與其……不如等がある。その用法を例示すると他不單只性質聰明而且很用功彼は只性質が伶俐であるのみならず其の上に大變に勉強をする)。這樣容易的事他還幹不來而況那樣事那兒能辦呢(此のやうに容易な事さへ彼には又爲せない。況んやあの如き事が什麼して爲し能ふや)の類である。

連詞は大體上記のやうなものであるがこれから更に今までお話ししたのを單獨のと聯絡ある連鎖連詞とに分類して用例を一々示して繰り返しお話をします。

## 單獨的

因爲 我信他的話因爲他是老實啦(私は彼の話を信用する彼は眞面目であるから)

除非 除非備今天不來他才安心(君が今日來なければ彼はやつと安心する)

雖則 雖則道路不好小孩子要回家的(道が悪いが小供は家へ同らうとしてるのだ)

若使 若使備肯去我也去罷(若しも君が行くを承知すれば私も行きませう)

但是 他的女孩子是聰明但是那男孩子是很笨彼の女子は伶俐であるが但しあの男兒は大變馬鹿である)

況且 這個東西我不要況且價錢又太貴(此のものは私はいらない況ん



や値段が高すぎるのであるもの)  
 所以 他知道我沒有工夫所他沒來(彼は私の閑のないのを知つて居る  
 ところ)彼は來ない)  
 而且 他很聰明而且有學問啦(彼は大變伶俐で其の上に教育がある)  
 就是 就是他一個人買的(即ち彼一人て買ったのである)  
 或是 備或是他明天一定來(君か或は彼が明日屹度來い)  
 可是 他願意看可是不願意辦(彼は看るのは願ふが然しする事は希望  
 しなう)  
 恐怕 他走的很慢恐怕晚哪(彼は歩くのが大變遅い、遅れるのかもしれ  
 ん)  
 如果 如果他肯來我也去(果して彼が來るのを肯じるなら私も行かう)

尙且 我做了一天尙且沒有做好(私は一日なしたが尙且つよく出来な  
 かつた)  
 不然 睡覺的時候不要見風不然要受寒的(睡る時には風に當つてはい  
 けない、さうでない)と風邪を引くてあらう)  
 那 照備現在這樣做那就容易成功的(君が今、このやうになすのに照  
 して、什麼して成功する者であらうか)  
 連續的連詞  
 不但……而且 他不但沒有本事而且很懶惰(彼は技倆がないのみ  
 ならず其の上に大變に怠けものである)  
 因爲……所以 因爲沒有工夫所以我沒去了(閑がないからそれで  
 私に行かなかつた)



與其……不如  
與其做來沒有益處不如不做(なして益がないなら

爲さるるに如かず)

若是……就 若是他能改過就不罰他了(もしも彼が改め能ふなら

ば即ち彼を罰せなす)

不是……就是 不是看戲就是會客(芝居を看なければ即ち客に遇

つて居る)

有……也 有煩難的也有容易的(面倒のものもあるが又易いのも

ある)有願意去的也有不願意去的(行くを希望する者もあるし又行くを

希望しないものもある)

要是……寧可 要是求菩薩寧可求自己(要するに菩薩を求むるよ

りは寧ろ自己に求むるがよい)。要是我去找他寧可等他來找我(要する

に私が彼を尋ねるより寧ろ彼の私を尋ねて來るのを待つのがよい)

除了……沒有 除了這個法子沒有別的法子(此の方法をのけて外

の方法はない) 除了備去沒有別人敢去了(君の行くのを除けて外の人

は敢て行かない)

一面……一面 一面整理事物一面招呼客人(一面には事件を整理

して一面には人を招いて居る)。一面和人說話一面暗自打算(一面には

人に話をなし一面には密に自ら思慮して居る)

不但……并且 不但害人并且害了自己(人を害するのみならず併

せて自分を害ふ)。不但名譽好并且可以賺錢(名譽が好いのみならず併

せて錢を儲ける事が出来る)

恐怕……連忙 恐怕被人聽了這話要起疑心連忙做出不動聲色的



様子來(人が此の話を聞いて疑りを持たれるのを恐れるなら連りに聲色を動かさない様子をなせ)

倘或………就 倘或他不在家裏就趕緊回來罷(もしも彼が家に居らねば即ちすぐに歸つて來い)。倘或他決意不肯來就不必勉強他了(もしも彼が來るを承諾しない決意ならば即ち無理に彼を來らせしむるには當らなう)

隨他………總 隨他把甜言密語來騙我總不會再陷他的網(巧言をもつて私を騙さうとしてもどうしても二度彼の網には陥らない)

無論………都 無論他做甚麼事都不去管他(彼が何を爲すの論なく

全て彼に構はぬ)。無論買進賣出都要大家相信的(買ひ込み賣り放ちの論なく全て大勢の信ずるものによる)

不如………倒好 不如晚去幾點鐘倒好有些預備(數時間遅く行くに

如かず反つて少し準備が出来て好い)。不如爾只做不曉得我(倒好和他

講話君は分らない風を爲すに如かず私は反つて彼に話し好い)

明曉得………却故意 明曉得那人不會辦事却故意去託他真是不可解

的(あの人が爲る事の出来ぬを知つてわざと彼に頼んだのは眞統に分

らぬ事である)

就是不能………也不會 倘如果凡事省儉就是不能做到財翁也不會

窮得沒飯吃(君が果して凡ての事に儉約であれば即ち金持となる事は

出來ないにしろ又飯が喰べられない程困りはせない)

爾道爲甚麼………原來 爾道爲甚麼來往的人這般熱鬧原來各廟香

市正在興旺時候了(何て往來の人が此んなに雜鬧するか原來が各廟の



香市が丁度旺んな時であるためである)

### 練習問題 十

下句中より連詞の種類を挙げよ

- 一、跟他是表兄弟嗎
- 二、假若我不能快回請備去一趟罷了
- 三、那一日他走的很匆忙所以丢了許多物事

## 第十章 嘆詞

嘆詞とは感嘆詞の事である。人が物に感じた時に思はず發する聲音であつて感動する場合に依つて喜びとか悲しみとかかて其れれに異なる。一々例を示して其の用法をお話をしやう。

歡びや嬉しい時

嚇。嚇。嚇。我們戰勝了(ほ、う、ら、あ、我共は勝つた)であるが嚇。嚇。嚇。はホウラアの發音通り譯して置く。邦語でもほ、う、ら、あと言はない事もないが、う、とかあ、つ、とか言ふのであらう。

楽しい時

哈。哈。哈。這馬蟻也會列陣打仗的哪(は、い、あ此の蟻も又列を作り戦つてる)

哈哈は笑ひ聲のは、い、のあて字でもある。

人を呼ぶ時

噲。噲。噲。快來(ほ、い、い、い、君早く來い)

呵。來吃呵(來て喰べろやあ)



## 承諾する時

啞● 啞從今以後不敢做壞事了(はい今後は屹度悪い事は致しません)。  
 啞は長上に對して使ふ。

啊● 啊我明白了(あッ私は分つて居ります)

## 驚異の時

啊● 啊呀不好了(あゝ不可ん)

唉● 唉呀我沒有想到這個了(あゝ私は此の事は想ひつかかなかつた)

嘎● 嘎暗這家伙倒利害(やあ此の道具は大變だ)

咳● 咳不知道他往那個地方去了(ほう彼が何所へ行つたか知らん)

## 心配の時

嘎● 嘎呀這時他一定遇到雨了(あゝ今度は彼は屹度雨にあつたらう)

哼● 哼天氣好悶啊(ふむ天氣がうつとし)

唉● 唉我這事情做錯了(あゝ今度の事は爲り損なつた)

## 疑惑の時

唉● 唉我不知道怎麼是好(おゝ私はどうして好いか知らぬ)

## 疑惑が解けた時

啊● 啊我知道了(あッ私は知つてる)

嘎● 嘎原來如此(あゝ原來が此の通り)

## 疲れた時

嘎● 嘎暗沒法子了(あゝ仕方ない)

## 悔恨の時

唉● 唉這小孩子真不了(あゝ此の兒も眞統に仕方がない)



哎●啲● 哎啲我的事辦錯了(あゝ私は爲り損なつた)

憎惡や憤怒の時

匪● 匪爾怎能知道的哪(へえい君はどうして知つてるのさ)

哼● 哼他辦事甚麼(ほん彼は何を爲す)

叱斥する時

嘿● 嘿爾再胡說(おい冗談を言ふな)

覺悟をした時

啊● 啊我知道他的心事了(あう私は彼の心事が知れた)

人を見下す時

哼● 哼這也要一塊兒算麼(ふん此も一緒に算へやうとしたのか)

鳥や物の音聲

啞● 槽をこぐ音

咕● 物を磨く音

咕● ことん／＼する物音

嗡嗡● 蜂のうなる聲

喔● 鷄の鳴く聲

嗚● 羊のなく聲

嗚● 羊のなく聲

嗚● 羊のなく聲

嗚● 羊のなく聲

嗚● 羊のなく聲

嗚● 羊のなく聲

嗚● 羊のなく聲

其他色々あつて一々擧げるは煩はしいが、吾々と耳が遠ふ譯でもないが、一寸聞くと、支那人の物の音や聲のあて字が意外に思はれるのが少くない。例へば猫の鳴き聲にしても吾々は小供の時分からニャゴ／＼と聞かされて居るせい、支那語のミィ／＼は一寸變に思はれる。



猫がミイ〜、羊がマア〜と鳴くし、鶏がウ〜と鳴く。が然し支那語を話さうとするには是非一通りは研究し、知らねばならない。幾ら吾々が聞く鳴聲と違つて居やうとも其は矢張り支那人が言ひ、聞いて分るやうに話さねばならない。

以上で各品詞のお語は終つたのであるが、例と言ひ、練習問題と言ひ、ほんの一部を挙げたに過ぎない。大體の各品詞の規則、その用法に就ては大略説明した積りであるが、本書を土臺として更に支那語文に就て自ら研究を進めんことを希望して置く。

これから句の構成に就いてお話をしやう。

## 第十一章 單句的構成

句には單句と複句との區別がある。先づ單句から説明しやう。

一句の内には其の句を構成する所の主となるもの——人とか場所、事物とかある。それを

句主

と云ふのである。次に句主の上に附加されて其を形容する詞がある。それは

區別屬詞

と謂れる。それから句主を説述する詞がある。それは

謂語

と云ふ。又た謂語の上に附加する詞で、それを修飾する詞がある。それは



## 疎狀屬詞

と謂れる。一句の内の四種別の内て、句主と謂語が句の構成には重要な位置を占める。何れが缺けても句と云ふものにならない。區別屬詞と疎狀屬詞は陳述する事實を更に明瞭にするに過ぎない。それで何れか、缺けるも或は双方が無くとも句の成立には差支へないのである。下に記する例に就て看られた時に句と云ふ事を更に明白にせられるであらう。

馬跑(馬が走る)

馬は句主であり、跑は謂語である。

白色的馬跑着(白色の馬が走つてゐる)

白色的は區別屬詞であつて、句主の馬を形容して居る。跑着(馬が走つてゐる)は謂語

である。

他的白色的馬跑得快(彼の白色の馬は早く走る)

他的白色的が區別屬詞であつて、句主の馬を形容して居る。快が疎狀屬詞であつて、謂語の跑得を修飾して居る。

凡て句主に區別屬詞のある時に完全句主と言ひ、謂語に疎狀屬詞のある時に完全謂語と言ふが但し區別屬詞は單に句主の上に附加するのみでなく、名物詞の受事或は補足語の上にも附加される。例へば

我看見我的朋友的黑狗(私は私の友達の黒犬を見た)の内て、我的朋友的黑は區別屬詞であつて受事格の狗を形容して居る。

張君的小說就是那本藍簿面的(張君の小説は即ちあの藍色の書である)の内て、那本藍簿面的が區別屬詞で補足語の書を形容して居る。



## 句主と區別屬詞の構成

凡て句主となる詞は種類が大變に多い、然し何れも名物詞か其の性質を持つて居るものに限る譯である。例を擧げて見ると

名物詞 雨下着(雨が降つて居る)の雨の如きが其の句主である。

稱代詞 我們(一定要去了)私共は(屹度行く)の我們が其である。以下句主には單に傍線をつけて置く。

名物詞性的動詞 工作是有有益衛生的(勞働は有益衛生的である)

未成句語 如此做法是費疑慮了(かくの如き爲し方は疑慮を費やす許りである)

それから區別屬詞となるものであるが、之は必ず區別詞か其の性質を持つて居る字でなければならぬ。之も種類が随分ある。

區別詞 紅的花都開了(紅い花が全て開いた)

區別詞性的動詞 落下來的果子(落ちて來た果物を君はどの位拾つたか)

主物格的名物詞或は稱代詞 我的兒子的先生(我的兒子的先生)今天到這兒來(私の兒供の先生は今日此所へ來る)

名物詞が區別詞の働きをする時 旅順的將軍(旅順的將軍)在夜裡頭出身去了(旅順的將軍は夜の内に出立した)

名物詞的同位詞 亞力山德馬其頓王(亞力山德馬其頓王)征伐波斯(アレキサンドル、マケドニア王はペルシヤを征伐した)

疏狀詞が區別詞の働きをする時 以後的人(以後的人)恐怕要害他們自己(以後の人)は彼等自身の害されんとするのを恐れた)



## 謂語と疏狀屬詞との構成

凡て謂語は動詞でなくてはならぬ。動詞に就ては前に詳説してあるから此所に再び繰り返さぬが、特殊な三四例を擧げて見る。

動詞が單獨で謂語となる場合、例へば

豚叫(豚がなく)——叫は自動詞

蛇被殺了(蛇が殺された)——被殺了は受動的他動詞である。

動詞の意味が不完全で補足語を必要とする場合、例へば

我的女孩兒已經成了家了(私の女兒は既に家を作つた)——成了は自動詞であるが、意思が不完全である。那馬賊已經受囑付去受嚴厲的刑罰了(あの馬賊は既に囑付を受けて行つて嚴重に處罰された)——受囑付は受動的他動詞であるが意思が不完全である。

他動詞は受事的であるを必要とする。それは下の例に徴しても明らかであらう。

園丁已經殺了那條毒蛇了(園丁は既にあの毒蛇を殺した)——殺了は他動詞。

他要教我的兒子了(彼は私の兒に教へんとした)主動的他動詞は受事と補足語を必要とする。

その用例も他們看見這疲乏的人睡着了(彼等は此の疲れた人の睡れるを見た)——看見は主動的他動詞、這疲乏的人是受事、睡着了は補足語である。

疏狀屬詞が動詞の時間とか式様、因縁、方法殊に

目的等を表示する時は全てが一定の疏狀詞的文字を用ゆるを必要



とする。その主要的疏狀屬詞とは下の數種の如きである。

副詞 他睡熟了(彼はよく睡つて居つた)

疏狀詞(副詞)性的語 他們走路東扯西挪(彼等は道を行くに東に寄つたり西に當つたりして行つた)

區別詞 他憂愁的去了(彼の憂愁は去つた)

區別詞性的動詞 他來看書(彼は本を看に來た)

疏狀受事 他走了十里地了(彼は十里歩いた)

これら單句の構成に就てのお話は濟んだのである。次には複句の構成法に就てお話をする。

## 第十二章 複句的構成法

複句には二個以上の分句とか單句が連詞に依つて聯結されて居るもので、之には並列式複句——唯單に兩句が並列されて、連詞があつて始めて複句の態をなして居るものと最一つは主僕的複句である。

之れは一個の主要の分句が一個或は數個の附屬的分句と連接されて居るもので、主要の分句は即ちそれのみで立派に一の意思を表示して居り、附屬して居る分句は單に句中に入つて名物詞とか區別詞、副詞の役目位を演ずるに過ぎないものである。先づ

### 並列式複句構成法

からお話をしやう。

太陽帶了炎威升起來那霜立刻消失了(太陽が炎威を帯びて來たのであの霜はすぐに消えた)——連詞の那に依つて居る。



他到我家來看我但是我沒有接見他他彼が私の家に遇ひに來たが但し私は彼に遇はないの但是によつて連接されて居る。此の種の複句の内には各句の内の句主とか動詞が相同的に一てもつて一方が略されて居る場合がある。例へば下に記する例のやうに

他到我家裡來但是他不多時就去的彼は私の家へ來たが但し永く居らんで行つたの時に但の次に他が略されて居る。句主の他が相同的である。それから動詞の相同的用例は

爾和他都有過失君と彼と全て過失があるの如きで、爾有過失と他有過失の二句より成り立つ可きのが省略されて居る。然し此所に注意すべき事は二個の名物詞や稱代詞の中に連詞を使用して前例のやうに一句主の句をなして居るが、前記のやうに分解の出さぬ句がある。

經驗和學問難得兩全的(經驗と學問とは兩全し得難い)。他和我是好朋友(彼と私は伸のよい友達である)の二例の内、經驗和學問と他和我は全て一個の句主と看る事が出来るが、之を前例のやうに經驗難得兩全的と學問難得兩全的。他是好朋友と我是好朋友的やうに兩分解する事は出さぬ。

## 主僕的複句

は前に並列式のと一括も話してある通りであるが、主句と僕句とに分れて居るのを次の様に三種に區別する。

## 名物詞性的分句

これには五種の用法がある。例へば動詞が句主となる他立刻要回來是一定的(彼がすぐに回つて來るのは定つて居る)。動詞の受事となる



場合——人家都不知道他到那塊兒去(人は全て彼が何れへ行くか知らない)。前置助詞の受事となる場合除非他講話太快(是一個優秀的先生了(彼の早過ぎる講義をのけては立派な先生である))。動詞の補足語となる場合這是沒有一個人能夠知道的(此所には一人の知り能ふ人がないのである)。名物詞の同位詞となる場合這捷報就是已經打得勝仗了我沒知道(此の捷報は即ち既に戦争に勝つたのであるが私は知らなかつた)の如き五用例である。

## 區別詞性的分句

這些個人他們是今天來的一個多沒有說真話(これ等の個人彼等は今日來たのであるが一人として真統の話をする者がなし)の内の他們是今天來的がそれである。

## 疏狀詞性的分句

這件東西他要做好了因爲他做得起勁啦(此の品物は彼が力一杯に作ったから好く出来て居る)の因爲他做得起勁啦が形容詞性的分句である。單句と複句の構成法に就ては之位にして、後は句並びに句の分拆を試みやう。それから文の構成へ移つて其れて此の支那語文法の研究を終りたいと思ふ。

## 第十三章 句的分解と句

先づ左記の單句から分析して見やう。

一、馬其頓王亞歷山德戰勝了波斯以後叫大亞歷山德(マケドニア王アレキサンドルはベルシヤに戰勝つて後大アレキサンドルと稱した)



- 二、剛纔他們看見這疲乏的人睡着了(たつた今、彼等は此の疲れた人の熟睡して居るのを見た)
- 三、我的父親教他的兒子菊仙很有進步(私の父は彼の子の菊仙を教へ、大變に進歩した)

句	主	區別屬詞	謂		語		疏狀屬詞
			主要動詞	受事	補足語		
一	亞歷山德	馬其頓王	叫	這疲乏的人	大亞歷山德	戰勝了波斯以後	
二	他	門	看見	(1)他的兒子 (2)菊仙	睡熟了	剛	纔
三	父親	的	教				很有進步

複句の内の二句及び三句用例を分解して左表に示すから他は類推

して戴きたい。

- 一、他的最恨的仇人和最好的朋友屢次保證他沒有罪孽(彼の最も恨める敵人も最も仲よい友も屢々彼の罪のないことを保證した)……二句例。

- 二、不是他就是備一定要開門哪(因爲旁的人沒有這個鑰匙)彼てなければ君が屹度門をあけたのだ(外の人には此の鑰を持つて居らぬから)……三句例

この二例の内て第一例を分解すると「他的最恨的仇人屢次保證他沒有罪孽」と「他的最好的朋友屢次保證他沒有罪孽」と云ふ二句が和字で連接されて居る。第二例は他一定要開門哪と備一定要開門哪に旁の人沒有這個鑰匙の三句から成り立つて、不是——就是と因爲の兩連詞で複







何時も明らかに表れて居らない。對話する時は大抵句主たる詞は省略される場合が多い。例へば

拿點心來(菓子を持つて來い)

快去罷快く行きなさい)

決不可再做那樣的事體(決して再びあのやうな事をするな)

以上の三例は何れも皆爾(君)と言ふ事が略されて居る。

#### 疑問句

人に發問するとか、疑問を持つて居る場合に用ゆる句である。

我的扇子在甚麼地方(私の扇子は何所に在る)

爾知道這回事麼(君は此の事を知つてるか)

#### 感嘆句

喜怒哀樂等の感情を表す詞で、語句はどうあらうとも感情を表すには發音が自然に感發するやうにせねばならぬ。

他來了(彼は來た)

這樣的好人真是難得啊(このやうな好人物は真に得難い)

爾的意思怎樣(君の考はどう)

回家去(家へ歸れ)

何れも感嘆の詞ではあるが、よく上記四例を調べられるとお分りになる通り、一二例は叙述の感嘆詞、三例は疑問、四例は希望し命令を含んで居る事を知らるゝてあらふ。

更に此の句の用法の上から細別すると幾多の種類となる。前述の四類別に大別であるが之を自然的と人爲的に分ける。自然の方には



敘述句と感嘆句と判斷句。人爲的の方には疑問句、命令句、請求句、商量句と分ける。之を表にすると左のやうになる。

句の種類

自然的

敘述句 (前述)

感嘆句 (前述)

判斷句(例)威爾遜是從前美國の大總統

疑問句 (前述)

人爲的

命令句 (前述)

請求句(例)請爾把我的帽子拿來

商量句(例)讓我明天再來罷

判斷句例譯(ウエルソンは以前米國の大統領である)

請求句例譯(どうぞ私の帽子を持つて來て呉れ)

商量句例譯(私に明日も來さして下さい)

次に構成する句の意味を分拆して見ると、正しい句であるとか、反句、宕句等澤山に分れる。之は唯支那に於て此のやうに區別して句を研究して居ると言ふ事だけを知つて居ればよいが、一通り知つて置く事は支那語を用ゐる支那文を綴る際に大變に便宜である。句類別と用例のみを擧げ、くどい説明は略する。

正句 中國是世界的大國應該做到第一的民族(支那は世界の大國である第一の民族となる筈である)

反句 誰都想做一個善良的國民那一個不想做一個善良的國民(誰しも一人の善良な國民となるを想い、どうして善良な國民となるを想はない事があらうか)



短句 暇快來(おい早く來よ)  
 長句 王君和李君現在已經一同入了中國耶穌教青年會(王君と李君は現在既に一緒に支那キリスト教青年會に入つた)  
 對句 爾看爾的報我念我的書君は新聞を看よ私は本を讀む  
 錯句 中國國民的消遣法只會看戲啦喝酒啦賭錢啦處々現出卑鄙的態度支那國民の消閑法は只芝居を看酒を飲み賭博をして卑しい態度を見せるだけである)  
 疊句 一室的人有的看報有的念書有的寫字(一室の人は新聞を看るもの讀書するもの字を書くものが居る)  
 排句 日本的國民大都溫和而恭謙西洋的國民大都活潑而勇敢(日本の國民は全て溫和て恭謙であり西洋の國民は全て活潑て勇敢である)

輕句 爾去也好不去也不要緊君は行くも好い行かぬも差支へない)  
 重句 這種事情我不能做(此の種の事柄は私には爲すことが出来ない)  
 緩句 天晚了回去罷請爾明天再來談談(時間が遅くなつたからお歸りなさい何卒明日また来てお話し下さい)  
 急句 此刻時候不早了爾快快回去罷(この時刻は早くない君は早く歸りなさい)  
 提句 勞工神聖是主張平民主義的這個主義我們都歡迎他(労働神聖は平民主義の主張である此の主義我等の全てが其を歓迎する)  
 宕句 我所講的話爾理會得麼難道當他耳邊風不要聽麼(私の説く所の話は君は理會しましたか什麼して耳の側吹く風と聞き流せやうか)  
 遞句 當兵先要體強體強須要操練操練須要守規則(兵士となるには先



づ體の強壯を要する體強には須らく鍛練を要する鍛練には須く規則を守ることを要する)

挫●句● 爾說兒童公育是不好的是做不到我却不相信(君は兒童官育を好くない事だ爲し得ざることだと言ふが私は却つて信じない)

逆●句● 我今天作文昨天寫字前天念書(私は今日文を作り昨日字を書き一昨日讀書した)

問●句● 爾此地來過沒有麼(君は此の地に來たことがあつたか)

驚●句● 這種香氣是從什麼地方來的(此のやうな香はどこから來るのか)

歎●句● 嗚呼這事被地弄壞了(あゝ此の事は彼のために打ちこわされた)

斷●句● 地球是圓的一晝夜定要自轉一週(地球は圓いもので一晝夜に一度一廻り自轉する)

その外に誠●句●とか挿●句●、撤●句●、銷●句●等もあるが餘りぐどくしいから略して置く。これ諸君は支那語文法の全てを研究し、その用法を知られ、其の構成迄を終つた譯であるから今後は之を應用されて正しい支那語を話し組織立てる支那文を綴り得る事が出来る。以下の各章は附録とでも言ふ可きものであるが

本書を熟讀せられ、更に自ら幾多の問題を作つて各品詞の分類研究を進め、邦語より支那語に譯して語法の相違——組織を深く學ばれるやうにせられたい。

## 第十四章 話文の組織

今まで説明したのは主として句であるが、其の句の集成が即ち文で



ある。文と言つても此所では日本にある漢文とか或は古文などてなく、普通に話して居る詞、其の儘を綴つた話文の組織を研究するのである。

支那では現今言文一致が素晴らしい勢で各方面に用ゐられんとする傾向を示して來て居る。

論說に、叙事に叙情に書翰に詩にさへ、あの面倒臭い作詩の規則を離れた自由な話のまゝの詩が現れて來て居る。先づ

## 論事文

の組織から調べて見やう。それには恰巧な適例である蔡元培の一文を示さう。論事とは論說文の事である。

## 勞工神聖

諸君、此次世界大戦争、協約國竟得最後勝利、可以消滅種々黑暗主義、發展種々の光明主義、我昨日曾經說過、可見此次的價值了、但是吾們四萬々同胞、直接加入的、除了在法國的十五萬革工、還有甚麼人這不算怪事、此後的世界、全是勞工的世界啊

我說的勞工、不但是金工木工等々、凡用自己的勞力、作成有益他人的事業、不管用的是體力是腦力、都是勞工、所以農是種植的工、商是轉運的工、學校職員、著述家、發明家、是教育的工、我們都是勞工、我們要自己認識勞工的價值、勞工神聖

我們不要羨慕那憑藉遺產的纨绔兒、不要羨慕那賣國營業的官吏、不要羨慕那剋扣軍餉的軍官、不要羨慕那操縱票價的商人、不要羨慕那領乾修的顧問諮議、不要羨慕那出售選舉票的議員、他們雖然奢侈些、他們良心上、不



及吾們平安多了、吾們要認清吾們的價值、勞工神聖

(譯文) 勞働神聖

諸君今度の世界大戦争は協約國が遂に最後の勝利を得て種々なる暗黒主義を消滅する事が出来て、種々なる光明主義が發展する。私は昨日お話しした通り今度の價值が分る。たゞ私共四億の同胞は直接加入したものはフランスに居る十五萬の支那勞働者を除いて何人が居つたであらふか。

此は怪しむに足りぬ事である。今後の世界は全く勞働者の世界である。

私の言ふ所の勞働とは單に金工木工などのみでなく、凡て自己の勞力をもつて他人を益する事業をなす者は體力を用ゆると腦力を用ゆる

とにかゝわらず全く勞働である。農は種植の勞働である。商は轉運する勞働である。學校職員著述家發明家も教育の勞働である。私共は全く勞働をして居る、私共は自分で勞働の價值、勞働神聖を認識する事を要する。私共は親の遺産によつて日を送つて居る上流息子を羨むに當らぬ、國を賣つて私利を計る官吏を羨むにも當らない、兵糧を私する軍官を羨むに當らぬ、票價を操縦する商人を羨むに當らぬ、力を盡さないで只だ報酬を受ける顧問諮議を羨むに當らぬ、選舉票を金にする議員を羨むに當らぬ。

彼等は少し奢侈である丈で、彼等の心は吾々の平安なのに及びもつかぬ。私共は清い私共の價值、勞働神聖を認めるのが必要である。

記述文



叙事や叙情文を含んで居るのである。眼前の景色、過去の事件や時間、間を細叙するので、清々整々、或は簡括に、讀む人をして其の叙する事實を髣髴せしむるのである。

## 司馬光破缸救兒

宋朝、有個司馬光、他在年輕的時候、和許多小孩們、在一塊兒玩耍、有個小孩自己不用心、忽然跌在水缸裡、其餘小孩都害怕極了、個々兒都避到別的地方去、那個時候、獨有司馬光、還沒逃去、就拿一塊石頭、打破那隻小缸、缸裡的水流到外面來、那個小孩也就從缸的破口裏面鑽出來了、有句成語道「急則智生」司馬光救那小孩的法子、豈不是配着這句話麼

(譯文)司馬光甕を破つて兒を救ふ

宋朝に司馬光なる人があつた、彼は少年の時に多くの小供と一緒に悪

戯をして居つた。一人の小供が不注意で突然水甕の中に落ち込んだ、外の兒は大變に恐れててんぐに外の所へ逃げ出した。その時、獨り司馬光はまだ逃げないで即ち一つの石を持つて來て其の甕を破つた。甕の水は外へ流れ出して其の子供もすぐに甕の破れ目からぬけ出して來た。格言に「急場になると智恵が出る」と言ふが司馬光がかの小供を救へる方法はなんと此の句に當てはまらないであらうか。

## 天津發達の景況

天津在北京の南面、接近渤海、又當白河下流、所以水路交通、極爲便利、又有京奉鐵路、西北通北京、東北通奉天、更有津浦鐵路、南通浦口、陸路交通也極便利、所以商務漸々發達起來、差不多同上海一樣了。天津南面的地方也、有各國租界、道路很整潔、租界的北面、街路也極寬平、路旁樹木極爲整齊、又



有公園、植物園、勸工場、大家都可以進去遊玩的、警察辦得很好、地方上絕無盜賊禍患、所以天津的警察是極有名聲的、天津的城牆、在十多年以前、已經拆除了城牆、原址改做大路、極爲寬平、房屋起了不少、居住的人家很覺擁擠、電車四面都通、往來也極便利、確是北方大商埠哩

(譯文)天津發達の景況

天津は北京の南方に在つて渤海に接し又白河の下流に當つて居る。そこで水路交通が極めて便利である。又京奉鐵道があつて西北、北京に通じ、東北、奉天に通じ更に津浦鐵道があつて南、浦口に通じ、陸路交通も又極めて便利である、そこで商業は漸々と發達して來て大概上海と同じやうになつた。天津の南の場所に各國の居留地があつて道路のよく整潔され、租界の北方の道路は極めて廣く路旁の樹木も大變に整

ふて居る。又公園植物園觀工場があつて多くの人が入つて遊ぶ事が出来る。

警察の管理がよいので彼地には絶へて盜賊の禍がない、そこで天津の警察は大變に名聲がある。天津の城壁は十餘年前に既に壊して城壁の原址は大道路に改造されて甚だ寬々として居る。家の建てられたのが少くない、居住する人家が大變に立ち並んで、電車は四方へ全て通じ往來も極めて便利である。確に北方の大商埠である。

日記

三月二日 天晴、上午和兄弟妹々一同遊戯去了、很覺快樂、下午兩點鐘、同學黃君到我家裏來、約我同到公園裡去遊玩、園裡各種風景、實在令人可愛、我等看了一回、就坐在地上談那記性和日記許多事情、兩人各有長處、也各



有短處、只在善用其長、補救其短就是了、直到天色將晚、方纔慢々兒跑了回來、晚飯以後、溫理國文第九課、還沒十分純熟、已經覺得疲倦了、母親就叫我  
去睡、等到明天早上再好好兒溫理罷、我就應命而睡覺

(譯文)日記

三月二日 天氣晴れ午前、弟妹と共に遊ぶ大變に愉快であつた。午後二時同級の黃君が家に來て私を誘つて公園に行つて遊んだ。各種の風景が實に良い氣持を人に與へる。私達は一度見て地上に坐りかの暗記物や日記や多くの事に就て語つた。二人は各自長處も短處もある、其の長處を善用し其の短を救ふやうにすればよいのだ。ずつと日が暮れるやうになつたので急がずに走つて回つて來た。晚飯の後に國文第九課を復習したがまだ十分に分らない内に最う大變に疲れた。

母が私にもう睡るやうにと注意し。明日早くもう一度よく復習すればいゝと云はれたから私は即ち言ひつけに従つて睡つた。

書翰文

これも從來は矢張日本と同じに話す言葉とは全然違ふ様式であつたが、近頃は從來の一定の格式とか常套語から脱して話す通りの自由な文體が用ゐられて來て居る。殊に若い人の間には此の種言文體の書翰文が流行して居る。二三例を示して見やふ。

賀友開店

某先生久不相見、正在思念、適接到爾的信、讀了一遍、才知爾集合資本、開辦某店、爾是商店巨擘、經營有道、此次待時而動、定可大展才猷、廣開財源、什麼黃金呢、白銀呢、好像那海洋流水滾々而來、豈不可欣可賀麼、花紅喜爆若干、



望爾收下、新張的日子、我將親自前來、叨擾一杯喜酒、祝爾大吉利

(譯文)友の開店を祝ふ

某君

久しく御無沙汰をしました、丁度貴下の事を思ふてる時。君のお手紙を戴き拜讀しました。始めて君が資本を集めて某商店を開かるゝことを知りました。君は商界の巨壁、經營には方寸がある、今度時を待つて動かれた次第であるから必ず大に才猷を展べ、廣く財源を開かれるてあらう、黄金何か、白銀何か、恰もあの海洋に水の流れる如くに滾々として流れ込んで来るてあらう、豈祝す可く賀す可きてはないか。御祝儀(花紅)の爆竹若干をどうぞお收め下さい。開店の日、私はお邪魔して一杯お祝酒を御馳走になつて、君の縁喜をお祝ひしやう。

### 報告市面情形

某仁兄

接到爾的信、問起近來市面情形、現在把我所曉得的、告訴爾、自從歐戰停止以後、商業本可望有起色、不過外貨來源、還未十分暢旺、價自仍舊很貴、各項國貨、像某廠所出的布疋、某廠所出的毛布絲襪、社界上都極歡迎、銷路頗旺、某公司所出的某牌肥皂、某牌牙粉、和那某公司製造的香烟、尤覺風行、一時代銷那等貨物的店家、無不利市三倍、爾處市面怎麼、生意興隆麼、有便也請告訴我

(譯文)市中の情況を通知

某君、君のお手紙を戴き近頃の市中の情況をお訊がありましたので。今、私の知つてゐる所を君にお話をしましやう。歐洲戦争が止んでから



後、商業は好景氣を示す筈ですが、外貨が流入したに過ぎないで未だ十分に旺んになりません。價格は仍ほ舊の如く高い、各種の國貨は某廠で出来る木線、某廠で出来て居る毛布絹足袋の如きは社界で皆大變に歓迎されて居る。販路も急に旺んになった。某會社から出す某印の石鹼、某印の齒磨粉とあの某會社製造の卷煙草が尤も時流に投じて、その品物を代賣する店は三倍から利益をあげざるはなす。

貴地の市場はどのやうであるか。貴店の商業は繁昌ですか、あついでこの節に何卒お知らせ下さる。

與友信約看花

某先生

明日早朝、我想到龍葉寺、看桃花、爾如能够伴遊、請爾早餐後、到我家裏、一同

去看祝爾愉快

(譯文)友を花見に誘ふ葉書文

君某、明朝私は龍葉寺へ行つて桃花を看やうと想ふ。君がもし御一緒にお出で下さるならどうぞ朝飯後私の家へ来て一緒に参りませう。君の愉快を祈る。

探訪事件

某先生

據報載湖南當局、已投降北方、確不確呢、我很希望爾能將眞實消息、告我祝爾康健

(譯文)探訪の葉書文

某君、新報掲載によれば湖南の當局は既に北方に投降したと云ふが確



實であるか、私は君が眞實の消息をお知らせ下さるを希望する。君の健康を祝す。

この様な手紙文や葉書が支那に於てやり取りせられて居るとすれば、随分と繁文褥禮の支那としては變つて來たものではないか。

## 話詩

自由詩とでも言ふ可きか、從來の型や規則に囚れぬ話す通りの詩である。これも近頃擡頭して來て居る。例をあげて見る。

## 一顆星兒

我喜歡爾這顆頂大的星兒

可惜我我叫不出爾的名、字

我只記得、每月月圓時、月光遮盡了滿天星、總不能遮住爾

今朝風雨後、悶沉々の天氣

我望遍天邊、尋不見一點半光明——

回轉頭來

只有爾在那楊柳高頭、依舊亮昌昌地

## (譯文) 一粒の星

お前一つぶの大きな星よ、私はお前が嬉しい。

惜しいことには、私はお前の名を知らない

私はたゞ覺えとる、毎月月のまゝるい時、空の星は月の光にかくされて了

ふが、お前だけはかくされない。

けさの荒しの後、うつとしい天氣

私は空を見廻した、何處を尋ねても、少しの光りも見えない



後をふり返つて見ると  
 おうあつた、お前一人が、楊柳の梢高く、いつものやうにキラリ〜と。  
 上記したのは一例であるが、このやうに各方面に話と同じ文が應用せられて来た。これと共に正しい話を話し、正しい話文を作る研究が生れて来るのは當然である。

従來の陳腐な、阿諛的で、面倒な彫琢的拘束され、呆滯的であつた文章から解放されて此の話文が用ゐられるに到つたのは無理もない。自由で而して簡易で撲質で實用的、思ふ儘の思想を開陳する事の出さる話文は昔の文章と比較にはならない。

次に文章と話との對照を示して見やう。

左の數篇は文章から話文に譯出した怪奇譚文例と、釋放婢女論。話文

から時文に反譯した論女子參政權と外に支那童話「靴穿く猫」一篇とてある。

### 怪奇譚文例

酒友(聯齋志異から)

車生者、家中不中賞、而耽飲、夜非浮三百不能寐也、以故牀頭尊常不空、一夜睡醒、轉側間、似有人共臥者、意是覆裳墮耳、摸之、則茸茸有物、似猫而巨、燭之、狐也、酣醉而犬臥、視其瓶、則空矣、笑曰、此我酒友也、不忍驚、覆衣加臂、與之共寢、留燭以觀其變、半夜、狐欠伸、生笑曰、美哉睡乎、啓覆視之、儒冠之、俊人也、起拜榻前、謝不殺之恩、生曰、我癖於麴蘖、而人以爲疑、卿我鮑叔也、如不見癡、當作糟邱之良友、卑登榻復共寢、且言、卿可常相臨、無相猜、狐諾之、生既醒、則狐



已去、乃治旨酒一盛、專伺狐、抵夕、果至、促膝歡飲、狐量豪、善諧、於是恨相得晚、狐曰、屢叨良醞、何以報德、生曰、斗酒之歡、何置齒頰、狐曰、雖然、君貧士、杖頭錢大不易、當爲君少謀酒貲、明夕來告曰、去此東南七里、道側有遺金、可早取之、語且而往、果得二金、乃市佳釀、以佐夜飲、狐又告曰、院後有窖藏、宜發之、如其言、果得錢百餘千、喜曰、囊中已自有、莫漫愁沽矣、狐曰、不然、轍中水胡可以久掬、合更謀之、異日謂生曰、市上收價廉、此奇貨可居、從之、收收四十餘石、人咸非笑之、未幾、大旱、禾豆盡枯、惟收可種、售種、息十倍、由此益富、治沃田二百畝、但問狐多種麥則麥收、多種黍則黍收、一切種植之早晚、皆取決於狐、日稔密、呼生妻、以嫂、視子猶子焉、後生卒、狐遂不復來

〔詞解〕中貲——貲は錢のこと、中貲は中流の家。鮑叔——周朝の管仲鮑叔の故事であつて前者は貧乏、後者は金持ちであつたが互に助けあ

つた仲、後來知已朋友の事を管鮑の交友と云ふ。糟邱——糟は酒の原料、邱は小山であるから酒の澤山ある意。杖頭錢——昔阮宣なる人が居つて酒を買ひ行く何時でも杖の先に一百個の錢をかけて酒店に行き、酒を買つたので、後の人が酒を買ふ錢の事を杖頭錢と云ふやうになつた。

〔意譯〕車生なる人は家に餘り金がないが寢酒を三杯飲まないと眠れない、それで枕元には何時も酒のない事はない。或夜眼が醒めてから寢返りして見ると、側に人が寢てるやうだ。かけてる衣裳が落ちたのだらうと思つて手を出してさわつて見ると、ムク／＼として猫よりも大きなものが居るやうだ。燭をつけてみると狐であつた。酔つて犬のやうに寢てゐる。その酒の瓶をみると空になつて了つて居るので、笑



つて言ふに、これは私の酒の友だ。驚かすのも氣の毒だと、衣服をかけた臂をかしてやり一緒に眠つたが燭を點けておいてどう言ふ風に化けるかと其の様子を伺つて居つた。

夜半になると狐は欠伸した。車生は笑つて言ふに、よく眠つたな。はね起きたのを視ると學生らしい若者になつた。起きてから生を拜して、殺さなかつた恩を謝したので、生は言ふに、私は酒が好きだ、人は私を愚物と言ふが君は私の仲のよい友だ。もし君が疑はねば私と酒飲み友達にならうさと、榻の上に登して又眠つた。而して言ふには、君は毎日來なさい。狐は點頭いた。生は眼が醒めて見ると狐も出て行つて了つた。そこで好い酒を整へて狐をまつと、夕方になると案の狀遣つて來た。膝を交へて歡飲した。狐は仲々酒豪である。仲々面白い

事も言ふので二人は意氣が相投じた。

狐が言ふには、度々御馳走になつて許りて御禮もしません。生が酒飲む喜びは其のやうなことを齒牙に置かうか。狐が、君は貧乏であるから酒の錢も仲々得易くなからう。君のために酒手を工面しましやうと言ふ。明る晩來て言ふには此れから東南七里(日本里一里餘)の道側に金が落ちて居る、早く行つて其を取りなさい。そこで翌日早朝に行くと、その通り二兩の金を得た。そこで好い鮓を買つて來て酒を飲んだ。狐が又言ふには、庭の後に窖藏がある、それを掘つて御覽なさい。その言葉通りにした所が錢百餘貫を得た。喜んで言ふに財布に十分金が出きたから、もう心配しなくてもいゝ。狐が言ふには、いや轍の中の水に等しい其れ許りの金は長い間掬む事は出きません。更に工